
とある科学の共鳴波動(Resonance wavemotion)

紅蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の共鳴波動 (Resonance wavemoti
on)

【Nコード】

N7300N

【作者名】

紅蘭

【あらすじ】

とある科学の超電磁砲、二次創作。

彼の有名な不幸少年と同じ高校に通うLEVEL3、下貴和磨。

しかし、彼はとある事情から2年の間システムスキャンを受けていなくて………？

キャラクター設定（前書き）

主人公＋オリキャラの設定をば。

キャラクター設定

Name . モトキ カズマ 下貴和磨

身長176cm 体重72kg 性別 男性 年齢17歳

能力《音響操作》サウンドコントロール

音を操ることが出来る。応用により様々な事を可能とする。

少し長めに伸ばした銀髪が特徴の高校二年生。

体格は細めの筋肉質で、上条当麻と同じ高校に通う。

とある事情から2年間能力測定を受けていない。システムスキャン

肉弾戦闘も得意なようだ。

《固有技》

《拡声》ロードスピーカー

小さな音を相手の耳元で増幅し、失神させる。

催眠音波を使う場合や、単なる爆音で相手の鼓膜を破壊する場合など攻撃法は多岐に渡る。

又、不協和音を耳元で鳴らすなど嫌がらせ目的に使われることも。

音量を押さえれば、遠隔での会話も可能である。

《音渡り》

周囲に満ちる音の波を足場とし、高速移動を可能とする。

腕や足のみに使えば超高速での打撃も可能。

《流動地水》じゅうどうちすい

土中で多数の音を発生させ、地面を振動させることにより擬似的な液状化現象を起こす。

しかし、技の性質上水分を含んだ土の地面以外では使えないため、使い道は少ない。

《反響探知》 アクティブソナー

対象の特徴から、音の反響を利用して探索する。

原理としては、漁船に詰まれた魚影探知機と同じである。

《妨害》 ジャミング

人の耳では感知できない周波数で、能力者の演算を狂わせる音を流す。

《共鳴波動》 レゾナンスウェーブモーション

演算により任意の弾道に音を拡声・反響・共鳴させるトンネルを形成し、爆発的な音により生まれた衝撃を撃ち放つ。

高度な演算を必要とする為に滅多に使うことはないがトンネルの形状を変え、弾道を曲げることも可能。

《終音》 サウンド・エンド

共鳴波動の仕上げのような技。

吹き荒れる嵐の如く突き進む共鳴波動を、任意の場所をトンネルの終点とすることで爆発を巻き起こす。

この爆発の原理は純粹な衝撃と音がトンネル出口がなくなることです許容量を超えるため。

よって、この爆発に火はおきない。

Name・モトカズ

身長約170cm 体重不明 性別 男性 年齢不明

能力 不明

スキルアウト《ホワイトタイガー白虎》を束ねる銀髪の男性。

愛車はZ2

Name・康志

身長167cm 体重53kg 性別 男性 年齢17歳

能力 無し

《白虎》のメンバー！

少し臆病な性格だが、重要な《旗持ち》を任されていることからモトカズからの信頼は厚い。

Name・くおん久遠 あきひ明

身長172cm 体重60kg 性別 男性 年齢17歳

能力 不明

茶の長髪と右耳のピアス、イヤークラスが特徴的な筋肉質の男。ストレンジに巣食うスキルアウトの一人。いつも仲良し5人と行動を共にする。

スキルアウト連中の中でも強い部類に入り、一目置かれている。カツアゲや喧嘩などはするが、仲間想いの優しい青年。

キャラクター設定（後書き）

オリキャラ、技を出すごとに追加編集していきます。

プロローグ（前書き）

独自解釈や自己設定、オリジナルストーリーなどなど絡んでいきませんが、生暖かい目で見てくださいと幸いです。

原作設定で間違えているところなどがあれば教えてくれるとありがたいです。

プロローグ

ここは、学園都市。

東京西部東・神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市で、その総面積は東京都の約3分の1に相当する。

その広大な敷地は23区画に分けられ、それぞれが第 学区と呼ばれる。

総人口は230万人を超える巨大都市で、その人口の8割は学生である。

そんな学園都市、人口の8割が学生なのに何故正常に稼働しているのか？

そこには夢のような理由が存在する。

その理由とは……学園都市内外の科学力の差である。

この学園都市では、最先端の科学技術が独自に研究・開発されており、都市の内外の技術格差は数十年以上とも言われている。まさに、夢の都市と言えるべき場所だ。

そして、学園都市には更なる夢のようなことが存在する。

それは………

.....超能力の存在。

学園都市の以上とも言える程に進んだ科学力は超能力を一つの科学とし、脳を開発することで超能力者を作り出すことに成功したのだ。

超能力は、能力の弱い順からLEVEL0 5で表され、それぞれに詳細な基準が定められている。

LEVEL0 - 無能力者

測定不能、又は極端に効果の薄い能力。

LEVEL1 - 低能力者

スプーンを曲げるなどの効果が薄く日常や戦闘の役には立たない能力。

LEVEL2 - 異能力者

低能力者とあまり変わらない程度の能力。

LEVEL3 - 強能力者

日常生活や戦闘に活用可能で、便利と感じられる能力。

LEVEL4 - 大能力者

軍隊において戦術的価値を得られる程の能力。

LEVEL5 - 超能力者

単独で軍隊と交戦、壊滅させられる程の能力。

尚、学園都市に存在する学生の約6割がLEVEL0、無能力者である。

低LEVELから高LEVELに上がる毎にその人数は減り、最高位であるLEVEL5に至っては学園都市内にたったの7人しか存在していない。

と、学園都市の説明はこの程度にしておこうか。

他の細かい情報については追々説明が必要な時に言っていこうと思う。

ん？そう言ってるお前は一体誰なんだ？だって??

失礼、名乗るのが遅れたな。

俺は、ここ学年都市に多数存在する学校の一つ、第七学区に存在する高校に通う普通の高校生男子。

名前は……

「下貴せとぎ！！測定中に何をボサツとしとるか！！」

……ツチ。

折角インテリっぽく知識を語って自己紹介をして高感度アップゲフンゲフン……いや、なんでもない。

兎に角、不本意ながら名前を言われてしまったが、気を取り直して行こうと思う。

俺の名前は、下貴せとぎ 和磨かずま。

17歳の高校二年生。

LEVELは……一応、3だ。

「一応、と言うのには少し訳がある。」

俺は、この中学三年からこの2年間能力測定を受けていないのだ。

理由は気にしたら負けだ、うん。何に負けるのかとかは聞くなよ？

「下貴い！……早くせんかあ！……！」

じゃあ、ゴリ「……教師も煩いしそろそろ能力測定に行つて来ようと思う。」

では、今日がアナタにとって平和な日である事を……

第一話・真逆な二人

「はあ……不幸だ……」

学園都市のとある一角。

薄暗い路地裏で黒髪の男、かみじょうとつまま上条当麻は呟いた。

そんな彼の周りには5人の男。

彼らはいずれも髪を染めピアスを空けた、『善良な市民』とは言い難い外見をしている。

何故、こんな状況になったのか。

それを説明するには、まずは彼の今日一日の行動から振り返る必要がある。

まず朝、目覚ましの故障（今月二つ目）により寝坊。

「ふ……不幸だああああああ！」と叫びながらダッシュで登校。（当然遅刻）

そして昼、学校で行われた能力測定。

ずっとお馴染みのLEVELO判定。しかも寝坊の為に財布を忘れ、昼食抜き。

放課後、朝に壊れていた目覚まし時計の替えを買ったために一度家に帰って財布を取ってから外出。

途中ショートカットのために裏路地を通過し、その際に不良に絡まれる女性を発見。

そして、今に至ると言う訳である。

天性のお人好し体質の為に見逃せず、不良達の気を逸らして女性を逃がしたまでは良いもの……
その後はどうするかを考えていなかった当麻であった。

「さて、どうしようかねえ……」

と、咳いてはみるがその場から逃れる妙案など浮かぶ筈も無く、当麻を囲む不良達は折角の獲物を逃がした為か殺気を孕んだ目で当麻を睨みつけ、ジリジリとにじり寄って来ている。

「はあ……本当に不幸だ……」

当麻はもう一度そう呟くと、唐突に右腕を振りかぶり、近くに迫っていた不良達の一人を殴り飛ばした。

当麻の拳は吸い込まれるかのように見事に不良の顔面にめり込むと、振りぬく腕に押されるように不良の身体が後ろへ倒れこむ。

突然の攻撃に一瞬動きが止まった不良達、その隙間……倒れた不良の上を又越して当麻は駆け出した。

「上条さん流・逃げるが勝ちっ!!」

「ッ!? テメエ!!」

当麻の言葉に我に返った不良達は、即座に振り向きあまり遠くには逃げていない当麻の背中を追って走り出す。

「待てやああああ!!」

「止まらねえとぶつ殺すぞコリア!!」

「待ってって言われて待つ馬鹿はいねええええ!!
つてか止まらないと殺すつて止まっても殺すでしょおおお!!?」

必死に逃げつつも、不良達の叫びに律儀に返事（ツツコミ?）を返す当麻。

しかし、その逃走劇は早くも終わりを告げそうだった。

何故か?理由は簡単。

昼食を抜いた当麻に不良達から逃げ切る体力など無かったからだ。

言っが早いか疲労で足が纏れて、誰も居ない路地裏に落ちた空き缶を踏みつると、当麻はその場に倒れこんだ。

「ぬおっ!?!ふ……不幸だあああああ!!!!」

頭の中に流れる数々の思い出（不幸な物ばかり）、スローで迫り来る地面。

傾く景色に激痛を覚悟した当麻は固く目を瞑り、来るべき衝撃に備えた。

「……………れ??」

しかし、いつまで待っても衝撃は訪れなかった。

走馬灯にしても長すぎる時間に疑問の声を上げた当麻は、固く瞑っていた目を恐る恐る開いた。

「大丈夫か?逃げ惑う少年A」

その目に映ったのは、体格の良い銀髪の青年が自分の身体を支えている姿だった。

さっきまでは居なかった筈の人物に助けられたことへの疑問。

助けられたことへの感謝。

考えることは多々あったが、何よりもまず今この場に居るのは危な

……

「やゝっと止まりやがったな……って、一人増えてんじゃねえか。」

……時既に遅し、上条当麻と銀髪の男性は先程の不良達に囲まれていた。

S i d e 下貴和磨

学校の帰り道、とある事で元気をなくしていた俺は、景気づけに新しいゲームでも買いに行こうかと寄り道をしていた。

と、俯きトボトボと歩く俺の耳に、下卑た複数の男の声と女性の小さな悲鳴が飛び込んできた。

路地裏か。

助けに行こう、そう思い自身の能力で駆けつけようとした俺は、次に聞こえた別の男の声でその動作を中断した。

《おいおいおい、大の男が五人も揃っていたいけな女性に何してん

ですかつと。》

《ああ！？何だテメエは！！！！》

《ども、上条さんです。》

誰か知らないが先に助けに入ったようだ。

そう判断した俺は、そ知らぬ顔で再び歩き出した。

その数秒後、《はあ……本当に不幸だ……》と、上条と名乗った男の声が聞こえた後、何かを殴りつけた時独特の鈍い音を俺の耳が拾った。

ここまでは良い……だが、

《上条さん流・逃げるが勝ちっ！！》

《《ツ！？テメエ！！！！》》

「逃げるんかいつ！！！！」

つい…… ツッコんでしまったじゃないか。

周りを歩いていた通行人は皆びっくりした表情をした後、気の毒な物を見る目で和磨を見つめながら立ち去っていった。

……泣いて……いいかな？？

若干涙目になりながらも、和磨は行動を開始した。

逃げ惑う足音から場所を特定、自身の能力を行使して移動を開始する。

と、次は空き缶を踏みつける音がし、続いて当麻の《ぬおっ!?!?ふ……不幸だあああああ!?!?》と言う悲鳴が聞こえた。

能力を使つて即座にその場に駆けつける。

そこには、身体が前方に傾き今にもこけそうな当麻の姿。

和磨は咄嗟に左手を出すと、倒れる当麻の身体を支える。

「……………れ??」

当麻が小さく声を発し、瞑っていた目を開ける。

それに対し和磨は少しふざけつつ、不思議そうな顔で自身を見つめる当麻に声をかけた。

「大丈夫か?逃げ惑う少年A」

戸惑いの表情を浮かべながら口を開く当麻。

しかし、彼が言葉を発するよりも早く、不良達の一人から声がかかる。

「やくつと止まりやがったな……………って、一人増えてんじゃねえか。」

この時既に和磨たちは不良四人に周りを囲まれていた。

逃げ道は……………無い。

「人を巻き込みしまった……………上条さんの不幸体質のバカヤロー……………」

和磨の腕に支えられた当麻が俯き意気消沈した様子でそう呟き、ガツクリと肩を落とした。

「上条とか言う少年、大丈夫かと聞いている。」

そんな当麻に俺が再度問いかけると、彼は俯いたまま答えた。

「今で怪我は無いけど今から怪我をする予定です……巻き込んでごめんなさい、上条さん憂鬱。」

「何を言ってるんだ？」

「助けてくれてありがとうけど、周り見て下さい見知らぬ人……」

「……この状況で勝算もなく飛び込むとでも??」

和磨がそう言うと、当麻は凄まじいスピードで顔を上げ、俺を見つめた。

「……どうにかできるんですかい?と、上条さんは思いますか?はい。」

「だから、出来るといってるだろう。」

若干呆れながらもそう言い切った和磨は、当麻を自力で立たせると周りの不良をゆっくりと見渡し口を開いた。

「先に聞いておこう、能力者はいるか？」

「あん?呼んだかあ??」

和磨の問いかけに呼応するかのように、先程当麻の発言を遮った男が声を発し進み出た。

そして、男が右手を胸の前に翳すと、その掌には燃え盛る炎が現れる。

「パイロキネシスト発火能力者……か。」

「それも、LEVEL3のな！！ひやははははは！！！」

男は自慢げに笑い、掌の炎を壁に向かい投げつけた。

炎は男の掌を離れ壁に衝突すると同時に炸裂すると、壁の一部を穿ち周囲に焦げ痕を残す。

「抵抗しなかったら能力は使わないでやるからよお……俺らのサンドバックになれや！！！」

そう言っつて、男は再び笑い声を上げる。

しかし、和磨はそれを覚めた目で見つめていた。

「構成、演算、発現。全てが荒いな……力を見せて萎縮させたいならばもう少し収束させた炎で圧倒的な力を見せるべきだ。

まあ……LEVEL3なら、こんなもんなのか……つても俺も昨日までは公式にはLEVEL3だったわけなんだが。」

「ッ！？テメエ能力者か！！！」

和磨の言葉で、彼が能力者だと気づいた不良達は、俄かに警戒を始めた。

「まあ、どちらにしる能力など使わせないから関係ないんだが……な。」

……パチンツ!!!

言い終わると共に、和磨は右手を頭上に掲げ指を鳴らした。

瞬間……唐突に崩れ落ちる不良達。

倒れ伏した不良達は皆一様に、その耳から赤い血を流している。

当麻は訳も分からず、啞然としながらその光景を眺めていた。

「さて、行こうか。上条とやら。」

「とりあえず、呼び方統一しないっすか？」

呆然としつつもツッコミは入れる。

それが上条クオリティ。

とある学園都市の公共食堂 ファミレス

「で、和磨さんはどうやってあの恐ろしいお兄さん達を倒したんですか？上条さん疑問。」

あの後、気絶した不良達を放置して二人は、近所のファミレスへと来ていた。

互いに自己紹介が終わり、当麻は和磨が学校の先輩ということもあって相変わらず敬語で話している。

「あれは、俺の能力だ。」

「いやいやいや、それは分かりますって。」

その能力がどう言った物なのかを上条さんは聞きたいわけです。」

「俺の能力は《音響操作》サウンドエフェクトロール。」

平たく言えば音の操作だな。あの不良達を倒したのも、当麻の下へ駆けつけたのも、当麻の逃走劇に気付けたのも全て俺の能力だ。」

「具体的には？」

「……まず、位置の把握には音を操作して声を拾い、その声を辿って断定した。」

次に、駆けつける時には《音渡り》と言う技を。」

これは、周囲に満ちた音の波に乗って高速移動する技だ。」

「ふむふむ……最後のは？」

「最後のが一番簡単だな。」

《拡声》ロードスピーカー。奴らの耳の中に拡声器を作った、って所か。」

「つまり？」

「俺が鳴らした指の音が、奴らには耳元で爆発が起きたかのような音に聞こえたってこと。」

「なるほど、上条さん把握。」

「ってか、じゃああの耳から血が出てたのは……」

「鼓膜が破れたんだろうな。」

「……えげつなくないですかソレ？」

「問題ない。」

人の鼓膜は破れても一週間もすれば再生するらしいから。」

「いや……でも……」

最後に言い淀んで、和磨を見つめる当麻。

それに気付いた、和磨はスツと右手を上げ、指を鳴らし ……

「だあああああ！！勘弁勘弁！！助けてもらったのにすいませんしたー！！！！」

「わかればいい。」

ゆっくりと腕を下ろす和磨に、ホツと安堵の息を吐く当麻と、当麻はいきなり顔を上げると再び口を開いた。

「とりあえず！！助けてくれてありがとう。和磨さん。

お礼に今日はこの不肖上条さんが奢りますよ！！」

「お……ならばお言葉に甘えて……」

「ふう……幸せだ……」

「ふ……不幸だ……」

その日、学園と市内の某ファミレス前で頬を緩めて微笑む和磨と、対称的に肩を落とし財布をひっくり返す当麻の姿があったと言う。

「では当麻、お前にとって明日が平和な日である事を……」

「和磨さん……厭味ですか？」

第一話・真逆な二人（後書き）

なんか俺が書くと上条さんが激しくウザいw
何故か口調がラストオーダーになってたりだしw

第二話・人の噂は千里を駆ける

とある高校の男子寮。

その一室の扉の前に、一人の男が佇んでいた。

扉の表札には《上条》の文字。

それをしっかりと確認した男は、扉の横についたインターフォンに手を伸ばした。

ピンポン……と間延びした音が鳴り、その後はただただ静寂が辺りを包み込む。

そこで彼は、ポケットから携帯電話を取り出すと、短縮から《不幸（笑）》を選択しおもむろに通話ボタンをプッシュする。

耳元では無機質なコール音が響き、扉の向こうからは陽気なポップミュージックが聞こえている。

しかし、電話が繋がることはない。

そこで彼はスツと右手を扉のある曇りガラスに爪を立てると、ゆっくりと引つかいた。

それと同時に……

「ぴぎやあああああああ!?!?」

朝一番、学園都市第七学区に上条当麻の悲痛な悲鳴が響き渡った。

「グッモーニン、当麻。」

「……………鬼畜、外道……………不幸だ……………」

それから10分が経ち、二人は現在当麻の部屋の中に居た。

和磨はさわやかな顔立ちで朝食を食べ、対称的に当麻は耳を押さえ
てうなだれている。

「健康に早起きできたんだから良いだろうに、早起きは三文の徳だぞ？」

「だからって……………ガラス引っかく不協和音を耳元で大音量はないと上条さんは思います……………」

「ならば鼓膜を破られるかドアをぶち破られる方がよかったか？」

「いえ、優しく起こしてくれてありがとうございます。」

平謝りで即答する当麻。

それに対し、和磨は朗らかに微笑む。

つして、自分の対面を指差すと、再び口を開いた。

「とりあえず、食べ。俺の手作りだぞ？」

「てかここ上条さんの部屋ですよね？」

「気にするな。」

「……………」

和磨をジト目で見つつも当麻は机の前に座り、箸を手取る。それを視界の隅に収めつつ、和磨は朝のニュースでも見ようとテレビの電源を入れた。

《……し伝説コーナーは以上です。続きまして、朝のニュースです。》

テレビの画面では、そこそ綺麗なお姉さんが満面の笑みでニュースを伝えている。

と、唐突に当麻が和磨に話しかけてきた。

「ってか、和磨さんの家って何処なんですか？
コレあつたかいし結構近いんじゃない？」

「普通に歩くと約40分つて所か。」

「……へっ!？」

「食べ物を入れたまま無様に開くな、汚いし行儀が悪い。」

「あっ……すいませっ ……つていやいやいや……
それって歩いて40分の距離をコレを持ってきたってこと？
じゃあコレ何で温かいんですか??？」

「俺の能力。」

「……余計意味わかんないです。上条さん困惑。」

まったく……そう言いたげに当麻へと顔を向ける和磨。

そのまま右手を上げると、当麻の部屋の一角に指を向ける。

「方法は違うが、アレと同じ原理だ。」

「え〜っと……電子レンジ？」

そう、和磨が指差したのは電子レンジだった。

「いいか？電子レンジってのは簡単に言うと、対象物にマイクロ波を当てることで分子レベルで振動させて、その摩擦熱で対象物を暖めるんだ。」

さて、ココで問題。俺の能力は？」

「音響操作……でしたよね？」

「ああ。では、音とは何か？分かるか？」

「……あつ、空気の……」

「そう、振動だ。俺は分子間単位で音を発生させて、分子同士の摩擦で物を温めたってこと。」

「なるほど……もしかしなくても和磨さん凄い感じじゃないですか？」

「別にそうでもないだろう……」

「てか能力は知ってるけどLEVELは？いくつなんですか？上条さん疑問。」

「それは……」

そこで語尾を濁し、机の上にあつたお茶に手を伸ばす和磨。
静かになつた部屋に、付けっぱなしだつたテレビのニュースだけが
響く。

《次のニュースです。何と、今まで学園都市に7人しか居なかつた
LEVEL5が昨日行われた能力測定で、8人に増えたと言つこと
です。尚、このことに対し風紀委員は ジャッジメント ……》

「ぶっ!?!」

と、唐突に和磨がお茶を噴き出した。

和磨の口から放たれたお茶は、当然のように対面に居た当麻の下へ
と降り注ぎ、一瞬にして微妙な空気がその場を支配する。

「……和磨さん……とりあえず言いたいことが幾つかあるんだけど
……」

「……まずはシャワーを浴びて来い。」

「あんたのせいだああああああ!?!?!」

当麻のシャウトが、部屋の中に大きく響き渡つた。

「よお、和磨じゃん?新たなLEVEL5。」

「黄泉川教諭……俺あんま目立ちたくないんでその呼び方やめてください。」

所変わって学校の廊下、そこで雑談する女性の体育教師、黄泉川よみかわと和磨の姿があった。

何故いきなり飛んで学校かって？

詮索される前に、と和磨が当麻の家から逃げ出し音渡りを使って一人、登校していたからだ。

ちなみに、当麻は既に遅刻確定である。

「目立ちたくないって言っても、今日皆が知ることになるじゃん？」

「……………は？」

「さっき朝礼で《我が高にも栄えあるLEVEL5が現れ》とか校長が言ってたな。」

今日は一・二時限を潰して全校集会、その場でお前のLEVEL5到達を発表することが決まったじゃん？」

「……………はあああああ？？」

「決定事項じゃん」

既に噂やニュースで広まっている上に発表されたら、恐らく学園都市中にお前のことが知れ渡るじゃん。」

「ふ……………不幸だ……………」

人の噂は千里を走る。

もはや、和磨に自身の名が広まるのを阻止する手立てはなかった…。

そして、またまた時は飛んで放課後。

「下貴先輩！！い……一緒に帰りませんか!？」

「……すまないが、用事があるので失礼する。」

本日5人目のお誘い。

和磨は予定通りに全校集会にてLEVEL5化が公表され、更には
レゾナンスウェーブモーション
《共鳴波動》等と言う名まで与えられてしまった。

それにより、予想通りに全校生徒の注目の的となってしまうていたのだった。

終礼が終わった後、普通に帰ろうとしたら教室前で待ち受ける生徒の壁、それに対し窓から逃走（教室は五階）し、帰宅しようとしていた当麻を強制拉致して引き摺り、逃げ回ったと言うのにこの人数。無名高校からのLEVEL5出現の注目度がうかがい知れる。

名も知らぬ女生徒の誘いを断った和磨は振り返り、待っていた当麻と歩き出す。

「モテモテのイケメンリア充君は死ねばいいと上条さんは思います。」

「当麻、鼓膜を破られたいか？」

「じゅめんなさい……！」

早くもお決まりと化したやり取りをしつつも帰路を急ぐ二人。

そんな平和な一時をぶち壊す人物が、唐突に二人の前に現れる……。

「そのアンタ。」

アンタが例の新しいLEVEL5、《共鳴波動》よね？」

後方からかけられた声に、二人は振り向き、声の主を確認する。

そこに居たのは、学園都市内で知らない者などいない常盤台中学の制服に身を包んだ茶髪の少女だった。

シヨートに切りそろえた髪にヘアピンをつけ、腰に手を当てた仁王立ちのような状態で和磨を見つめる少女。

「……君は？」

「私は、《常盤台の超電磁砲》レベルガン御坂美琴。みさか みこと

で、アンタが《共鳴波動》よねって聞いているの。違うの？」

「違わないが……そんな有名人が俺なんかは何の用だ？」

訝しげに問いかける和磨、それに対し美琴は当然と言いたげな顔で次の言葉を発した。

「用件なんて一つしかないじゃない。

同じLEVEL5同士……勝負しなさいっ……！」

第二話・人の噂は千里を駆ける（後書き）

次回、《超電磁砲》VS《共鳴波動》

の予定W

第三話・電撃姫と最弱（前書き）

とりあえず……言ひじとは一つ。

しめんなわい

第三話・電撃姫と最弱

「さ、始めましょうか。」

「はあ……何故こうなる……」

所変わって、ココは人の居ない河川敷。

周囲には和磨の能力で人が嫌い、避ける音を永続的に流しているため、人避けはしっかりと施されている。

防音対策もばっちりだ。

しかし、当の和磨は余り乗り気ではなく、肩を落として立ち尽くしていた。

そのすぐ後ろには、和磨と同じく肩を落とした当麻の姿がある。

彼らのはあの後、早急に逃げようとしたのだが、美琴がその場で自身の異名にもなっている《超電磁砲^{レールガン}》をぶっ放そうとしたので慌てて止めて、渋々後について来たのだった。

「何ゴチャゴチャ言ってるの、とつとつ……始めるわよっ!!!」

そんな二人とは対称的にヤル気満々な美琴は、欠片も空気を読まずに唐突に攻撃を仕掛けてきた。

バチバチと凶悪な音を発する雷の槍が美琴の手から放たれ、和磨の下へと飛来する。

「ッ!?……つと。」

「ぬおおおおおおお！？」

それを、多少驚愕の表情を浮かべながらも咄嗟に半身になり、大きく一步横へ移動することで避ける和磨。

そしてその避けた雷の槍は、当然のように和磨の後ろに居た当麻の下へ……。

「上条さん・エスケエエエエエエエエエプ！！！」

奇声を発してそれを避ける当麻。

そこには優雅さの欠片も感じられず、例えるなら猫から逃げる鼠のような滑稽な姿だった。

「当麻、煩いぞ。」

「酷くない！？仮にも今上条さん死にかけたんですけど！？
しっかりと打ち消すとかそらすとかしてくださいよ！！！」

「出来んこともないが面倒だからな……っほ。」

「またきたあああああああ！？」

いつも通りの漫才のような掛け合いを続ける二人の下に、更なる凶刃^{げき}が放たれる。

又も軽く避けた和磨に、ただ奇声を上げる当麻。

当たるか、と思われたその攻撃をも当麻は再び無様な動きながらも避けきった。

「ちよっ！？マジでお願いしますよ和磨さん！！！」

「嫌だ、面倒くさい。」

次々と飛来する雷撃を上手く避けつつ掛け合いを続ける二人。それを見て、激昂する人物が居た。

「……………あんたたちっ！！そうやってふざけてあたしを馬鹿にしてんの！？」

言わずもがな、凶刃でんげきを放ち続けるも避けられていた美琴である。

二人としてはコレが『いつも通り』であるからこそその光景なのだが、それを知らない美琴にしてみれば『軽くあしらわれた』、と言う気分なのだろう。

「……………うううう……！！！」

プライドを傷つけられたためか、身体を震わせて怒りを表す美琴。その身体からは怒りに比例するかのよう電撃が漏れ出していた。

そして、次の瞬間……………

「学園都市のLEVEL5序列第三位をナメるなあっ！！！」

大きな怒号を発し、それと同時に体中からは凄まじい量の電気を放電する。

そして、美琴は放出した電気を右手に集めると、それを和磨ではなく当麻に向けて放った。

「まずは……………邪魔なアンタから眠りなさい！！！」

感情の爆発具合から美琴の激しい怒りが窺い知れ、迫る雷撃に顔を青くする当麻。

その雷撃は、先程までの物とは質量・スピード・威力共に桁違いの物で……………

「上条さん死んじゃいますって……………うおわあああああああ
!?!?!?」

そのまま、一瞬で雷に包まれて姿が見えなくなる当麻。

「当麻あ!?!?!?!?!」

驚愕の表情を浮かべ、それを見つめる和磨。

彼としても、こんなことになるとは思っていなかった為に止められずにいたのだった。

「くっ……………御坂とやら。」

当麻の仇は討たして貰うぞ……………!?!?!」

「最初からそうやってかかってきたらよかったのよ!?!?!」

悲痛な叫びと同時に、音に乗り移動する和磨。

一瞬にして美琴の背後に回りこむと、スッと腕を振り上げる。

その腕が振り下ろされる、その瞬間。

雷撃によっておきた砂煙の中から、聞こえるはずがない男の音が響き渡る。

「おいおいおいおい……………コレ明らかに人殺せるくらいの力あるじゃ

んか。

いつくら温和な上条さんもそろそろキレますよ?」

「なっ!?!?……ま、まさかっ!?!?」

驚愕の声を上げる和磨。

その視線の先、砂煙から現れたのは雷が直撃したと思われていた当麻だった。

「まあ〜ったく……、元気良すぎるのも悪いわけじゃないけど、人殺しは駄目だろ?ビリビリ。」

「っ!?!誰がびりびりかっ!?!?」

「お前以外いねえだろ……。」

はあ……能力見せなくなかったのに……不幸だ……」

怪我をした様子も無く、いつも通りに肩を落とすような垂れる当麻。それを、今しがたツツコミを入れた美琴と、只眺めていた和磨は呆然と見つめている。

「あ……あなた、なんで無傷なのよ!?!?」

「何でって……能力?」

「……あなた、LEVELは?」

「……無能力者だ。」

「嘘言ってるんじゃないっ!?!」

あたしの雷撃を止められるLEVEL0なんか居るわけ、ないで……しょっ……!!」

……バチバチバチッ!!!

再び美琴の腕に眩い雷光が迸り、当麻に向かって放たれる。それを、棒立ちで待ち受ける当麻。

今度こそは直撃する、そう思われた。

しかし、当麻が右腕を顔の前に翳しそこに雷撃が衝突した瞬間……

「LEVEL5がなんだってんだよ……」

……そこから電撃が分かれ、消滅した。

「LEVEL5が最強だってんなら……俺の最弱で覆してやんよ!!」

そして、美琴の電撃が全て消え去った時、そこにはやはり無傷の当麻が凜と立っていた。

「能力の発動条件は右手……か。
触れずに使えるのか、右手以外はどうか、能力はなんなのか……
……気になる所だな。」

もはや美琴と当麻に忘れ去られ、傍観モードに入った和磨が一人呟く。

冷静に当麻の能力を判断、分析した和磨とは逆に、美琴は混乱していた。

「なんでよ……なんで傷一つ無いのよアンタツ!？」

「能力だからつつつたる……LEVEL0の《最弱》だけど、な。」

「っ……電撃が効かないならっ!!！」

と、次は地面に手をつけて電流を流す美琴。

その手が地面から離れると、手のひらに付いて来るかのように黒い何かが現れ、剣の形を象る。

「物理攻撃なら……どう?ちなみにコレは、砂鉄。

高速振動してるからチエーンソーみたいになっててね……当たるとちよつと痛いかもねっ!!！」

「それを痛い、程度で済ませるのはどこぞのスーパーイヤ人位だと思っただけだ……」

静かにツツコム和磨を尻目に、美琴は当麻へと剣を振りかぶる。それを飛び退けて避ける当麻。

しかし、

「形は……いくらだって変わるんだからっ!!！」

剣状から鞭状に変わった砂鉄が進路を変えて当麻へ迫る。

土を削り、小石を跳ね飛ばしながら迫る凶刃に、又も当麻は右手を向けた。

「……だあっ!!！」

砂鉄の鞭は当麻の右手に触れた瞬間に飛び散り霧散した。
そして、当麻が立ち上がる。

その頬には一筋の傷に、流れる鮮血の紅が。

「小石が掠ったか……だが、砂鉄は消せたのに何故だ？
砂鉄との総裁に全能力を使ったからか？

……………不思議な能力チカラだな。」

細かい所まで観察し、感嘆の声を漏らす和磨。

その瞳には面白い物を見つけた時のようにキラキラと輝いていた。

と、美琴が真剣な表情になり、ポケットに手を突っ込んだのに和磨は気付いた。

ポケットから出された美琴の手には一枚のコイン。

それを見て彼女が何をしようとしているかに気付いた和磨は地面に手を付けた。

「コレだけは……生身の人間には使いたくなかったけど。

仕方ない……使わせて貰うわよっ！！《超電磁砲レールガン》！！！！」

言葉が終わると同時に、甲高い音を立ててコインが上空に打ち上げられる。

放物線を描き、美琴の手へと再び落ちてくるコイン。

それを待ち受けるかのように、体中から微弱な電流を発する美琴が手を伸ばす。

御坂美琴がLEVEL5たる所以、二つ名にもなっている《超電磁レールガン》

砲》発射準備が整った。

「まったく……超戦略級兵器に匹敵する威力の技をほいほい使っ
てんじやない。」

………つとー！！《流動地水》（りゅうどうちすい）」

《超電磁砲》（レールガン）が発射される、その瞬間。

発射台となる美琴の指が空振り、放たれることの無かったコインが
美琴の足元に『沈み込んだ』。

「なっ！？何よコレ！？」

「うわっ！？」

コインの同じく、当麻と美琴の身体が膝辺りまで地面に沈みこむ。
逃れようと暴れても、まるで土が水のように纏わりつき脱出を許さ
ない。

とうとう二人の身体が腰辺りまで沈みこんだ時、その現象は止まっ
た。

「二人とも、一度落ち着け。」

特に御坂。お前はな………」

「邪魔しないでよ！！！！」

「はあ………ならば少し眠って貰おうか。」

和磨がスツと腕を上げ、指を鳴らす。

……そして、美琴は意識を失いその場に倒れ伏した。

第三話・電撃姫と最弱（後書き）

主人公が最後のみ目立ち……

そして自身の戦闘描写の拙さに絶望した

あと俺の書く上条さんはもはや誰だか分からないorz

第四話・共鳴波動（前書き）

今更ですが、一話一話の長さ短くてすみません。

一度書き始めたは良いものの、書き上げられずに中断してしまうと文章がおかしくなってしまうので、いつも切りのいいところで終わらせています。

申し訳ない。

第四話・共鳴波動

「ん……………」

「やっと目が覚めたか……………」

「よっ、ビリビリ。」

美琴が目を覚ますと、そこには先程と変わらぬ二人の姿。いや、何故か当麻の頬が腫れていることだけは違うが……………」

「……………なんであんたらが居るのよ？」

と、どうか……………寝た記憶が無い。

……………さっきまで私は何をしていた？

いまいち頭が働かない美琴は、ボーっとしながら考えていた。

「……………シヨックが強すぎたか？」

鼓膜などは傷つけずに催眠音波で眠らせたんだが……………」

「……………?」

わけがわからない、そう言いたげに美琴は首を傾げる。

……………少し萌えたのは秘密だ。

「まあ、少々端折って説明しようか。」

まず、君は俺に勝負を仕掛けてきた。」

「上条さん的には和磨さんは避けてただけな気がするんですが……」

「当麻、少し黙ってる。」

……パチンツ

「うごごっ！？耳があああああああ！！？？」

耳を押さえのた打ち回る当麻。

それを気にもかけずに和磨は再び説明を始める。

「その戦闘中に、その馬鹿が君の雷撃を打ち消した。」

それを見た君が暴走し、馬鹿と君の勝負へと発展した。」

「……思い出してきたわ。」

「それは良かった……では、自分が何をしようとしたかも分かっているな？」

「一般人の……LEVELO……無能力者に……」

「ああ……お前は《超電磁砲^{レベルガン}》を放とうとした。」

頭に血が上っていたとは言え……殺人を犯そうとしたんだ。」

「……ツ！？違っ……！！！」

「……違つと言えるのか？」

使用者であるお前自身が一番、《超電磁砲》の威力は心得ているは

「ずだがな。」

「……………あ……………う……………」

「もしも《超電磁砲》が放たれ、それを当麻が防げなかったとしたら。」

「……………当麻は消し飛び今頃挽き肉になっていただろうな。」

突きつけられた現実には動揺する美琴を、更に和磨は追い詰める。

「高LEVEL保持者だからと言ってみだりに能力を行使してもいいのか？」

否、高LEVEL保持者だからこそ、強い力を持つ者だからこそ、能力の行使には細心の注意を払わなければいけない。

その能力は、意図も容易く人を殺せるんだと……………肝に銘じる。」

「……………」

美琴は沈痛な顔で黙り込む、だが、和磨は沈黙を許さない。厳しく、低い声で再度美琴に呼びかけた。

「……………いいな？御坂美琴。」

ここに誓え。その能力を正しく使うことを……………」

「……………はい……………」

目に涙を溜め、美琴は頷く。

それを見た和磨は優しく微笑んだ。

「それでいい。」

今回は最悪の事態を未然に防げたんだ。
それにお前は一つ、学ぶことが出来た。
ならば、能力を正しく使い、更に強くなれる筈だ。」

「……………うっ……………うっ……………」

声を押し殺してなく美琴。

そんな彼女を優しく抱きしめ、和磨は変わらず微笑んでいた。

「耳が……………耳があ……………」

当麻は未だに耳を押さえて倒れていた。

十分程経った頃だろうか？

美琴が和磨の腕の中から離れ、毅然とした表情で顔を上げた。

「落ち着いたようだな。」

「ええ、その……………」

「ありがとう、ね……………」

顔を赤らめ、礼を述べる美琴。

その姿は歳相応で、とても有名な《常盤台のエース》とは思えないほどにしおらしい物だった。

「気にするな。」

「言うか、そうしていると君も可愛い女の子なのだな。」

「かつ！？可愛い！？」

「……？」

「ああ、普通に可愛いと思ったのだが、気分を害したか？」

「そう言うと、更に顔を赤らめ俯いてしまった美琴。」

「失言をしたかと思えば不安げな顔になる和磨に、依然顔は赤いながらもバツと顔を上げた美琴は怒鳴るように言葉を発した。」

「そつ！！そんな事よりアンタの能力を見せなさいよ！！」

「私の能力だけ見てアンタのは見せないなんて不公平じゃない！！」

「その声は明らかに裏返し、動揺が目に見えていた。」

「が、それはご愛嬌。ツッコまないのが花と言う物だろう。」

「能力？先程の君を気絶させる時に《流動地水》や《拡声》等は使ったが……」

「私が言ってるのはそんな小技じゃなくて、アンタの二つ名になっている《共鳴波動》よ。」

「……そんなことまで知っていたか。」

「と言うか、《流動地水》は振動で擬似的な大地の液化化現象を起こすというそこそこの大技なのだが……」

「つべこべ言わずにやるっ！！！！」

「上条さんも和磨さんの技見たいですね。」

「当麻……お前もか。」

いつの間にもやら復活していた当麻も加わり、和磨に技の披露を促す。流石に断りきれなくなった和磨は、ため息を吐きながらもそれを承諾した。

「はあ……仕方ないな。」

少し、離れている。」

和磨がそう言うと、二人は数歩後ろへと下がり、和磨から距離をとった。

《共鳴波動・トンネル形成》

と、和磨が小さく唇を動かして呟く。

それと同時に、周囲から一切の音が消えた。

いつもと同じように、和磨が頭上に腕を翳す。

そして、その腕を振り下ろし、自身最強の技を放った。

《共鳴波動》
レソナン及エアープーション

……ゴウッ！！！！！！

和磨の指先から、唐突に空気を乱し、空間を歪める程の衝撃が放たれる。

その衝撃は大地を穿ち、砂を巻き上げながら突き進む。

《終音》

……ドゴオオオオオン!!!!

最後の眩き。

それと共に凶悪なる衝撃波は大地を揺らし、爆ぜた。

激しい砂埃が巻き上がり、衝撃に飛ばされた小石などが飛来する。そして、砂埃が晴れるとそこには、大きなクレーターだけが残っていた。

大地に残る無残な爪痕が、その衝撃の威力を物語る。

当麻と美琴はそれをただ呆然と見つめていた。

「《終音》はもう少し手加減するべきだったな……」

後に響いた音は、和磨のその一言だけであった。

後日、《超電磁砲》御坂美琴の証言により、《共鳴波動》下貴和磨のLEVEL5序列第三位が決定した。

「もっと有名になってしまった……何故だ……」

「何だらけてんのよ、有名になることも強者の定めなんだから受け入れなさいよね。」

「はぁ……不幸だ……」

いつもならば当麻が言う台詞を眩き、肩を落とす和磨。
その肩にポンッと手を乗せ、当麻が満面の笑みで言った。

「和磨さん、アナタにとって今日が平和な日であることをっ！！！！」

厭味だった。

この後、耳を抑えてのたうち回る当麻の姿がそこにあったそうだ。

第四話・共鳴波動（後書き）

ご意見・感想をいただくと嬉しいです。

第五話・風紀委員（前書き）

今回は黒子です。

眠いながら書いたので駄文……後日しっかりと修正します。

第五話・風紀委員

「和磨、今日の放課後ちょっと職員室まで来て欲しいじゃん。」

「……俺、なんかしましたか？黄泉川教諭。」

ある日の朝、いつも通りに当麻と登校した和磨は、何故か校門で待ち受けていた黄泉川に捕まっていた。

黄泉川からの突然の呼び出しに怪訝そうな顔で問いかける和磨。

「とりあえず来るじゃん。」

「……承知しました。」

しかし、その答えは得られないままに強制をされてしまったのだ。た。

「和磨さん、黄泉川せんせーに何言われてたんですか？」

「放課後に職員室呼び出しだ……コレと言って何かをした覚えは無いのだが……」

「毎日毎日、HR終わった瞬間窓から飛び出して帰宅してるからとか？」

「……有り得ん事も無いな。」

そして、放課後。

言われたとおりに職員室へと参上した和磨は、黄泉川に連れられて体育館へと来ていた。

「ここじゃん。じゃ、私は雑務があるから失礼するじゃん。」

「え？ちよつ……黄泉川教諭？」

そこで置いてけぼりを食らう和磨。

仕方なく、扉を開けて体育館の中へと入っていく。

そこに居たのは茶髪ツインテールの女の子。

背は低く、美琴と同じ常盤台の制服を着ている。

そして、その左腕には腕章付けられている。

あの腕章は確か……

「シヤッシメン風紀委員ですの。」

そう、風紀委員の腕章だ。

風紀委員とは、学園都市の学生のみで構成された組織で、その活動は犯罪行為の抑止や騒動の鎮圧から、町の清掃活動や落し物の探索など多岐に渡る。

要は、学生達による治安維持組織と言った所だろうか。

「風紀委員が、俺に何のようなんだ？」

何も問題などは起こしていないはずなんだが……」

いきなり風紀委員だ、と言われても、和磨には風紀委員との接点等無く、ましてや放課後に呼び出される覚えなどまったく無いのだ。

「俺は銀髪ではあるが、これは生まれつきの物だ、断じて染めてなどいないし不良では……」

「……そんなことは分かってますの。」

「では、何故？突然呼び出されて風紀委員だといわれても何がなんだか……」

「それもそうですわね。」

まず、突然呼び出し時間を取らせてしまったことをお詫びいたします。

私は、常盤台中学一年、風紀委員第177支部の白井黒子（しろい くろこ）と申しますの。」

「俺は、下貴和磨。まあ俺びについては気にしていない。続けてくれ。」

「では、今日お呼びしたのは他でもありません。あなたに風紀委員に入って欲しいんですの。」

「………は？」

「だから、勧誘ですの。」

呆けて口を開いたまま固まる和磨。

そんな彼に呆れながらも黒子は理由を説明する。

「アナタは最近、この一帯での犯罪行為を何件も解決してますよね？」

「……………カツアゲを止めたりとかか？」

「ええ、アナタ自身はその場に残っていないくとも、あの惨状を見れば誰でもわかりますの。」

それで、複数の相手を最小限の攻撃で制圧できるアナタの能力を買収して、勧誘に來ましたの。」

私達風紀委員としましても、学園都市の新たなLEVEL5に風紀委員に入っていただけるのは心強いですし……………」

「しかし、風紀委員に入るには厳しい体力テストと筆記試験があると聞いているが？」

「それについては、特例で免除ですの。」

ただ……………ひとつだけ。」

「一つだけ……………なんだ？」

そこまで言って、黒子は何かを考え込むような顔で黙り込んだ。数秒の間を置き、再び顔を上げた黒子が次の言葉を発する。

「私と、戦って欲しいんですの。」

腕試しみたいなもので、遠慮は要りませんですの。」

「だから、体育館か……………まったく、常盤台には戦闘バトルマニア狂しいないのか……………」

「……………？
とりあえず、よろしいでしょうか？」

「……………ああ、風紀委員の活動については興味があるしな。
その勝負、受けよう。」

「ありがとうございます。
では……………参りますのっ！！！！」

そう言った瞬間、黒子の姿が消えた。
それと同時に後方を感じる気配。

「《空間移動能力者》か……………」

和磨はそう呟くと即座に身を屈めた。
その頭上、先程まで頭があった位置を黒子のドロップキックが通過する。

「中々……………やりますわねっ！！」

又も黒子の気配が瞬時に移動し、今度も背後に現れる。
それに対し、和磨は屈んだ状態の足を一気に伸ばし、後方に跳躍する。

バク宙をして避けた和磨の目には、つい今しがた自身が居た位置を通り過ぎる黒子の足払いが写っていた。

そのまま着地と同時に、和磨は背を向ける黒子に足払いを放った。

襲撃直後の隙を狙い放たれたその攻撃を避けられず転倒する黒子。
しかし、その身体が地面につく前に姿が消え、少し離れた位置に現

れた。

「くっ……能力も使わずにコレとは……
私コレでも風紀委員では結構な実力者ですよ？」

「まあ……お前の攻撃は結局は只の物理攻撃だからな。
気配が読めれば避けられる……音で位置が掴める俺なら尚更な。」

「なるほど……勉強になりましたの。
では、コレならいかが？」

と、三度消える黒子の姿。
先程と同じように、移動した気配は和磨の背後にあった。

少々気が引けるが、後ろ蹴りで決め……ッ！？

性懲りも無く同じ攻撃を仕掛けてきたと思った和磨がそう思考して
いると、唐突に景色が反転し身体が浮遊感に包まれた。

「……………くっ……！！！」

咄嗟に受身を取り、致命的なダメージを回避した和磨。
しかし……

「甘いのですっ……！！！」

「あぐっ……！！？」

今度は自身の上にテレポートしてきた黒子の全体重を乗せた蹴りを、
腹部に食らい悶絶する。

いくら小柄で体重も軽そうな黒子とはいえ、その全重量を腹部の溝に食らえば只では済まない。

この時点で黒子は勝利を確信し、油断が生まれた。それが……仇となった。

「げぼつ……」
《妨害》^{ジャミング} 《音渡り》。」

「……えっ??？」

和磨が倒れ伏しながら呟いた。

その瞬間、唐突に和磨の姿が掻き消え、黒子は首に違和感を覚えた。

「少し手間取ったが………チェックメイトだ。」

気付いた時には既に遅く、黒子は和磨に後ろを獲られていた。

不覚ですのっ!!

演算、確定、テレポ………ッ!?

即座に自身の能力で抜け出そうとする黒子。

しかし、何故か演算が狂い能力は発動しなかった。

「なっ!?!なんでですのっ!?!」

「《妨害》^{ジャミング}、演算を妨害する音波を流してる。

つまり………演算が出来ない今のお前は、無能力者も同然だ。」

混乱する黒子に、和磨は拘束したまま説明をした。それを聞き、黒子は理解した。

もはや自身がこの拘束から抜け出す術はない、と。

「……………降参してくれるか？」

「ええ、もう詰んでいるのに無駄な足掻きをする気はありませんの……………参りましたわ。」

和磨が静かに黒子に問いかけ、彼女はそれに応じた。

その瞬間黒子の拘束は解かれ、同時に和磨の風紀委員入りが決定したのだった。

所変わって、風紀委員第177支部。

勝負が終わった二人はこの場所を訪れ、書類を製作してからお茶を飲んでいた。

他の風紀委員たちは現在、仕事によって出払っている。

「本当に便利ですね、その能力。」

それに、身体も鍛えられているようですし、あのお姉様よりも上と言つのも頷けますわ。」

「……………お姉様？」

「我が常盤台のLEVEL5、《超電磁砲》御坂美琴お姉さまですの。」

「……ぶほっ!?!」

「ちよっ!!大丈夫ですよ!?!」

「ごほっ、大丈夫だ……《超電磁砲》と知り合い、なのか?」

「え……ええ、ルームメイトですけど、何か?」

「いや……」

これはまた、近いうちに遭遇するんだらうな。
エンカウント

和磨は遠い目をしながらそう思い、乾いた笑みを浮かべていた。

「では、俺はそろそろ帰るとしよう。」

「そうですね。」

私も帰らないと寮監様に大目玉を食らわされてしまいますわ。」

「白井、明日がお前にとって平和な日であることを。」

「あら、風紀委員になった以上平和な日など早々ありませんですよ?」

「まあ気にするな。」

これは口癖みたいな物だ。」

「そうですね。」

それでは、御機嫌よう。」

振り向き、歩き去る和磨。

その背を見つめながら、黒子は一言呟いた。

「下貴和磨……不思議な殿方ですの。」

一方、和磨はそんなことを言われているとは思ってもよらずに一人、思考に耽っていた。

それは、遠い日の記憶。

深い思考に足を止め、脳裏に浮かぶ景色を見つめる。
そして、もはや会うことは無いであろう、嘗ての友を思い出していた。

『和磨、明日がアナタにとって平和な日であることを願って。』

『にとつてもね!』

『は?なんで……なんでいないの!?』

『彼女はね……』

未だ鮮明に思い出す笑顔、声。

自然と出てくる涙を拭い、和磨は歩き出した。

学園都市に住む……いや、世界中の人々の明日が、平和であることを願いながら。

第五話・風紀委員（後書き）

少し伏線を引いてみました。

ご意見・感想をお待ちしています。

第六話・電磁波動（前書き）

くっ……後半は眠気でグダグダ……申し訳ない

第六話・電磁波動

「お兄ちゃんありがとう〜!!!」

「ああ、もう迷子にならないようにな?」

「うん!!!またねえ〜!!!」

小さな女の子が和磨に手を振って母親と歩いていく。

それに、微笑みを浮かべながら同じく笑顔で手を振り返す和磨。

その後ろには、黒子が控えている。

「ホント、便利な能力ですね。」

「ああ、風紀委員は俺の天職だったようだ。」

そう、今日は和磨の風紀委員としての初仕事の日だ。

まだ黒子以外の風紀委員とは顔合わせをしてないが、既に幾つかの仕事をこなしている。

一つ、落とし物の搜索。

能力を使って、すぐに発見。(対象物の特徴を聞き、音の反響で特定。《アクティブソナー反響探知》)

一つ、喧嘩の鎮圧。

黒子の携帯端末に、能力者同士の喧嘩があるとの連絡。

即座に現場へ《音渡り》にて駆けつけ、《拡声》にて無力化。

一つ、迷子の子供の探索。

名前を聞き、特定の単語に絞って長距離の音を拾う。（特に技名なし）

親の名を呼ぶ子供の声を拾うと、位置を特定し保護。

そして、冒頭に至ると言うわけである。

普通にやればそこそこの時間がかかる事ばかりなのだが、和磨の能力によってその全てが短時間で解決していた。

風紀委員が天職、と言うと職業ではないために少しおかしな気もするが、確かにそう言えるほどに和磨の能力は仕事に役立っていた。

「さて……一段落したことだし少しお茶にしませんこと？」

「ふむ、そうしようか。」

全てが短時間で終わったとはいえ、外は照りつける太陽で結構な気温となっている。

流石に動き続ければ暑いと言うものだ。

二人は連れ立って近くのファミレスに入ると、暫しの休憩と相成った。

「ふう……いいものだな、人の役に立てると言うのは。」

「それは、風紀委員としていい兆候ですよ。」

「ああ、人々の笑顔が見れる仕事は遣り甲斐があるよ。」

そのまま、しばらく他愛の無い話を続けていると、いきなりフアミレス内に聞き覚えのある声が響き渡った。

「黒子、何よいきなり呼び出し……って!?!? なんでアンタが居んのよ!?!?」

「……………俺が聞きたいんだが。」

現れたのは、《超電磁砲》御坂美琴だった。

「あら、お知り合いですの?二人共。」

「先日少し……な。」

「ええ、ちよつと……ね。」

「……………?」

まあ、紹介する手間が省けていいですの。」

二人の煮え切らない態度に訝しげな顔をしていた黒子だったが、諦めて無理矢理納得したようだった。

そこで、美琴も席に座ると、先程言いかけたことを再度言い直した。

「で、いきなり呼び出してなんなのよ?

しかも、一緒に《共鳴波動》まで居るし……………」

そう言つて、和磨をジロリと睨みつける美琴。

それを真正面から見つめ返し、ため息を吐きながら和磨は口を開いた。

「まったく……先日も言ったが、そんな目付きをしていては可愛い顔が台無しだぞ？御坂
俺はお前が呼び出されることも知らなかったし、呼び出された理由も知らないぞ？」

「……………ッ！？」

と、小さく息を呑み先日と同じように顔を紅くして俯く美琴。
それを不思議そうな顔で見つめる和磨。

なんだか和やかな雰囲気広がる場に、黒子の咳払いが響いた。

「ゴホンッ……………和磨さん、お姉さまを余り誘惑なさらなくてくださいですの。」

「……………誘惑？いや、そんなつもりは……………」

「反論は認めませんですの。
で、話を戻しますが、呼び出した理由はお二人にあって欲しい人が居るからですの。」

「会って欲しい人？」

「ええ、風紀委員第177支部で私のバックアップをしてくれている子ですの。
お姉さまのファンで、一度で良いからお姉さまにお会いしたいと事ある毎に……………」

「……………ちょっと待て、それって俺は関係無くないか？」

「話しを聞いてませんでしたの？」

彼女は風紀委員第177支部のオペレーター、つまり同僚ですよ？折角集まるのですから紹介しておきませんと。」

「まあ、そう言う事ならいいが……」

と、そこで美琴が大きなため息を吐く。

それを聞きながらも優雅にコーヒーを口元に運び、一口飲んでから再び黒子が口を開いた。

「お姉さまが常日頃から、ファンの子達の無礼な振る舞いに閉口されてるのは存じてますわ。」

けれど、初春は分別ういはるを弁えた大人しい子。

それに何より、私が認めた数少ない友人。」

そこまで言っつて、黒子は一度コーヒーを机の上に置き、傍らに置いていた鞆から手帳を取り出す。

「ここは、この黒子に免じて一つ……」

あつ、もちろんお姉さまのストレスを最小限に抑えるべく、今日の予定は私がばつちりと…… ああつ、ちよっ!?!?」

「……ふうん、なにになにい?」

唐突に黒子から手帳を奪い、それに目を通す美琴。

彼女はそのまま、それを読み始めた。

「初春を口実にしたお姉さまとのデートプラン。

その一、ファミレスで親睦を深め。

その二、ランジェリーシヨップ（勝負下着購入）

その三、アロマシヨップでシヨッピング（媚薬購入）

その四、邪魔者駆除。

その五、お姉さまとホテルへGO……」

「あは、あはははは……」

「つまり、大人しくて分別ある友人を利用して自分の変態願望をかなえようと……」

「いえ、その……あの……」

夥しい量の汗を流しながら口ごもる黒子。
それを横目で睨みながら、美琴が叫んだ。

「読んでるだけで……すんげえストレス溜まるんだけどお……!!」

そのまま黒子の頬を両側で抓り引っ張る美琴。

その様子を、和磨は手帳の内容にドン引きしながら眺めていた。

「おねえふあま、いふあいれふいふあいれふ……!!（お姉さま、痛いです痛いです……!!）」

そこで、美琴が手を離し美琴が小さなため息と共に次の言葉を発した。

「でも……黒子の友達じゃあ、しょうがないか。」

「お……おお、お姉さまあああああん……!!」

突然跳ね上がり、同時に能力で美琴の膝の上に転移した黒子は、そ

のまま美琴に抱きつき何やら叫び続けている。
困惑する美琴に、ヒートアップする黒子。

和磨がそんな百合百合な展開から目を逸らし窓の外を見ると、そこには柵川中学の制服に身を包んだ女の子が二人、呆然と黒子と美琴を見つめていた。

「おい、あれが例の人物じゃないのか？」

「え？……あゝ！！！」

ばつちりと目が合った美琴と二人組。

相変わらず黒子は暴走を続け、美琴に愛を語り続けている。

そんな一団の背後から、少し遠慮気味の声がかかった。

「あの、お客様？申し訳ありませんが、他のお客様の迷惑になりますので……」

当然と言えば当然なことだ、天下の公共食堂ファミレスで大声を上げながら百合な展開をしていれば誰だって止めに来るだろう。

……ゴインツ！！！！

そして、美琴が黒子に制裁を与える音が、その場に響き渡った。

ファミレスから出た三人は、外に居た二人組と黒子を間に挟んで対面向き合っていた。

と、まだ痛むのか頭を摩りながら黒子が口を開いた。

「とりあえず、紹介しますわ……こちら。」

そう言っつて、二人組のほうへと手を向ける。

「柵川中学一年、初春飾利さんですの。」

紹介を受け、黒のショートカットに花飾りをつけた少女が緊張しながら口を開いた。

「はっ！！初めましてっ！！初春飾利です！！」

言い終えた初春が顔を伏せると、黒子が少し困った様子で口を開く。

「それから……」

「どくもく、初春のクラスメイトの佐天涙子です。なんだか知らないけど、着いてきちゃいました。ちなみに能力値はLEVEL0です。」

それを引き継ぐ形で自ら自己紹介をした少女。

彼女は長い黒髪に、白梅を模した物だろうか？花飾りをつけている。

その自己紹介には、少々自身のLEVELを蔑む様なイントネーションが含まれており、それを聞いた初春が慌てて声をかける。

「さ、ささ！！佐天さん何をっ……」

「……初春さんに、佐天さんね。」

私は、御坂美琴。よろしく。」

「へっ？……えっ、ああ。

よ、よろしく。」

「……お願いします。」

しかし、それに動じることも無く美琴が自己紹介をすると、二人は固まりつつも言葉を返した。

と、只一人、未だ自己紹介をしていない和磨に初春と佐天の視線が飛ぶ。

だが、その視線の意味に気付かない和磨は何食わぬ顔でそれをスルーし、場が沈黙に包まれる。

そこで沈黙に耐え切れなくなったのか、おずおずと初春が問いを發した。

「あの、そちらの銀髪の男性は……」

「ああ、名乗るのが送れてすまない。

俺は、今日から、風紀委員第177支部で働くことになった下貴和磨だ。

高校二年の17歳。よろしく頼む。」

「あ、新しく入ることになった方ですか……って、じゃあアナタがあの《共鳴波動》さんですか!？」

「……ああ、そうだ。」

驚いたのか、大声を出して和磨に詰め寄る初春。

それに若干苦笑しつつも和磨が返事を返すと、次は佐天が疑問の声を発した。

「初春、《共鳴波動》って？」

「佐天さん知らないんですか!？」

「う……うん。」

先程よりも更に大きな声を出し、全身で驚きを表現する初春。

それに和磨と同じく苦笑しつつ、佐天が返事を返すと、初春は熱く語り始めた。

「良いですか？佐天さん。」

《共鳴波動》とは、この学園都市に新たに生まれたLEVEL5の一人で、出現直後にして《超電磁砲》御坂美琴さんを抜き、LEVEL5の序列三位に君臨してる方で……」

「初春。」

今、この場にそのお二方がいらっしやいますのよ?」

「ほえ?……あっ!?!?!」

黒子に窘められ、やっとそのことを思い出した初春は、恥ずかしそうに顔を伏せた。

「さて、滞りなく自己紹介も済んだところで、今日の予定はこの黒子がばっちりとおっ……」

……ゴインッ!?!?!

「…………痛い。」

「まったく…………まあ、こんなところにいつまでも居ても仕方ないし。」

黒子が再び先程の手帳を取り出し、独自に練った予定を告げようとした所で、美琴の鉄拳が黒子の脳天を直撃した。

気を取り直し仕切りなおした美琴は、初春と佐天の方を見ながら言葉が続けた。

「とりあえず…………ゲーセン行こっか？」

「…………へっ？（ほえっ？）」「」

呆然とする二人を他所に、美琴は黒子を促すと二人に軽い微笑みを見せて歩き出した。

そして、しばらくゲーセンで遊ぶと、五人は次に行く場所を求めて歩き出した。

と、他愛の無い話が切れた所で、黒子が非難の声を上げる。

「もうっ！！お姉さまったら…………」

ゲームとか立ち読みではなく、もっとこっ、お茶とかお琴とか。ご自身に相応しい趣味をお持ちになれませんの？」

それに対し、美琴は路上で配られているビラを受け取りながら返事をした。

「うっさいわねえ……大体、お茶とかお琴の何処が私らしい趣味だ
って言うのよ?」

そんな二人の会話を聞きながら、少し後ろを歩いている佐天が初春
に話しかけ、それに便乗するように初春が言葉をつなげる。

「なんかさあ……全然お嬢様じゃない?」

「上から目線でもないですねえ。」

「ん? ってか何ソレ?」

と、佐天が初春の持つビラに目を付けた。

「新しいクレープ屋さんみたいですねえ。」

先着100名様に、ゲコ太マスコットって……」

「何このやつすいキャラ、今時こんなのに食いつく人なんて……う
っ」

言いながら歩いていた佐天は、前を歩いていたはずの美琴にぶつか
り声を止める。

「あっ、すみませっ……ん?」

「御坂さん?」

が、声をかけるも美琴からの反応は無い。
その視線は手に持ったビラに向けられている。

それを見て、黒子が美琴に声をかけた。

「どうなさいましたの？お姉さま。

……あら？クレープ屋さんにご興味が？

そ・れ・と・も、もれなく貰えるプレゼントの方ですか？」

「……………うっ！」

「……………えっ！？」

一瞬動揺して息を詰まらせた美琴だったが、即座に身を翻すと慌てて弁解を始める。

「なっ！！何言ってるのよ！！

わ、私は別にゲコ太なんか……………

だ、だってカエルよ？両生類よ！？

何処の世界にこんな物貰って喜ぶ女の子が……………

「……………あつ。」

しかし、そこで何かを見つけた初春が小さく声を上げる。

その視線の先には……………

「ん？……………げっ！？」

美琴の鞆に付けられて、可愛く揺れるゲコ太の姿が。

笑いを堪え明後日の方向を向く黒子に、言葉を失う二人。

と、そこで、美琴が一つのこと気づいた。

「つて、《共鳴波動》は何処行つたのよ??」

「遅れてすまない。」

「一番後ろを歩いていたら、迷子がいてな……保護していた。」

言つが早いか、美琴の後ろには和磨の姿が。

恐らく音渡りで現れたのだろうが、いきなりすることに驚き飛び退く美琴。

「ア……アンタ驚かさないでよっ!!」

……つて、その子が例の?」

和磨に向けて非難の声を上げ、その途中で何かに気付いく。

そう、和磨の足元には一人の男の子が立っていた。

「ああ、この先にあるクレープ屋で休憩中の一団からはぐれた様だな。

今から俺はこの子をそこまで連れて行ってくるが、君たちはどうする?」

その和磨の台詞に、美琴は目を輝かせ、黒子は吹きだし、佐天と初春は顔を見合わせた。

色んな反応を返され困惑する和磨を尻目に、美琴は元気よく返事を返す。

「仕方ないわね、皆!!行くわよっ!!!!」

「……………?」

さて、現在和磨は美琴と一緒にクレープ屋の行列に並んでいる。
和磨が前、美琴が後ろだ。

既に迷子の少年は保護者に引き渡しており、黒子、佐天、初春は席取りに行き、二人が残りの三人の分のクレープを買う、と言う算段である。

と、先程から美琴は気難しい表情を浮かべ、時間を気にするかのように指でリズムを刻んでいる。

「どうしたんだ？難しい顔をして。」

「……何でもないわ。」

「そうか？何か急ぎならば順番が変わるが……」

そう言った瞬間、美琴の顔がパアッと輝いた。
が、次の瞬間には何かを誤魔化すような表情に変わり、裏返った声で言葉を発する。

「い、いや……順番なんて、私はクレープさえ買えればそれで……」

「やったあ〜！！ゲコ太げつとあ〜！！！！」 「私も私も〜！！！！」

「い……い。」

語尾を濁しながら、ゲコ太を持ってはしゃぐ子供を見つめる美琴。

と、そこで和磨の番が訪れた。

和磨が手早く自身のコーヒーと、佐天と初春のクレープを注文すると、店員が商品と一緒にゲコ太ストラップを差し出した。

「お待ちせしました。」

はい、どうぞ？最後の一個ですよ。」

その店員の言葉と同時に、背後から変な音が聞こえた。差し出されたストラップを受け取り、和磨が後ろを振り返ると……そこには地に膝をつき頂垂れる美琴の姿が。

「ど……どうしたんだ御坂。」

「ミサカはミサカは何でもありませんと頂垂れながら言ってみたり……」

「キャラが違うぞ、オイ。」

はあ、とため息を吐きながら和磨は握った片手を美琴の目の前に翳した。

不思議そうにその手を見つめる美琴。

「ほら、手を出せ。」

「……………?」

言われたとおり、素直に手を出す。

その掌に、静かにゲコ太が乗せられた。

「やるよ、俺には要らない物だ。」

「へっ!?!い……いいのっ!?!」

「ん? いらなのか?」

「いるいるいるっ!! ありがとおおおお!!」

キラキラと顔を輝かせ、目に涙を浮かべたまま美琴が和磨の手を握り、感謝の意を示してくる。

それに苦笑いで答えながら、和磨は美琴にクレープを買わせ、既に席を取って待っている三人の下へと急いだ。

女子四人はクレープを食べながら会話に花を咲かせ、和磨は一人ソレを眺めて微笑んでいる。

その時、唐突に和磨の顔が歪み、道路を挟んだ対面にあるシャッターの閉まった銀行を睨み付けた。

能力により強化された聴力が、何かしら異常を感じ取ったのだ。

和磨が能力を集中させ、中の様子を窺おうとしたその時、初春がシャッターの閉まった銀行に気がつき呟いた。

「あそこの銀行……なんで昼間から防犯シャッター下ろしてるんでしょうか?」

その瞬間、和磨が動いた。

同時にシャッターが内側から吹き飛び、銀行内部から爆炎が吹き上がる。

駆け出した和磨から遅れること数秒、次に動き出したのは黒子だった。

手に持っていたクレープを一口で納めると、即座に駆け出した。

「初春！！アンチスキル警備員への連絡と、怪我人の有無の確認をつ！！」

「黒子っ！！」

《こちら和磨、現在爆発が起きた銀行内部に居る。

怪我人は既に確認、犯人は3人。怪我人を優先し、犯人の無力化は行っていない。

だから御坂、落ち着いてそちらに居る一般人に被害が及ばないように警戒を頼む。

白井は犯人の無力化、確保を。》

「和磨さん！？……了解ですの！！」

「まったく……わかったわよ！！黒子！！しっかりやりなさいよ？」

『はい、そうです。第七学区のふれあい広場前の銀行で、強盗事件発生。アンチスキル警備員の出勤を要請しますっ！！』

初春が警備員への連絡を終えた頃、黒子は吹き上がる黒煙の間近にまで近づいていた。

と、その黒煙から三人の男が飛び出してくる。

三人とも黒の革ジャンに身を包み、その口元には顔を隠すために布が巻かれている。

彼らの目の前に躍り出た黒子は、左手の腕章を彼らに見せながら、声高く叫んだ。

「風紀委員シヤッジメンですのっ!!」
器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します!!」

それを聞いた男達は、立ち止まり顔を見合わせた後、笑い始めた。
そんな彼らを怪訝そうな顔で見つめる黒子。

「なんだあ!?!このガキは!!」 「風紀委員も人手不足かよっ!!」
「ヒヤハハハハハ!!!!」

それに、黒子は顔を顰めながら彼らへと歩み寄っていく。
すると、男達の一人のゴツいドレットヘアの男が口を開いた。

「お嬢ちゃん、とつとどつか行かないとお……」

男が走り出し、黒子へと迫る。

「怪我しちゃっ……ぜっ!!!!」

言葉と同時に振りかぶり放たれた男の拳。
しかし、その拳は意図も容易く黒子に避けられ、空を切った。
静かに眩きながら黒子は男を倒すために動き始める。

「そっいつ三下の台詞は……」

黒子はその場で身体を回転させ遠心力をつけると、その力を使って
男の手首を引き、同時に踏み込み軸足となった足を払う。

魔法のようにゴツイ男の身体が浮き上がり、その場で半回転すると、
背中から地面に叩きつけられた。

そして、地面に倒れ伏し白目を向いた男を見下しながら、黒子は言葉を繋ぐ。

「……………死亡フラグですわよ？」

「なあっ!?!」「てめえ……………!!!!」

仲間をやられ、いきり立つ強盗達。

そんな光景を見ていた佐天が呟くと、同調するように美琴も呟きを漏らす。

「すごい……………」

「さすが黒子ね。」

と、俄かに何かを言い合う声が聞こえ、二人の意識がそちらへ移った。

そこには、必死で何かを探すバスガイドの女性と、それを止めようとする初春の姿が。

「どうしたんですか？」

美琴が問いかけると、切羽詰った様子でバスガイドの女性は状況を説明した。

「男の子が、一人居ないんです!!!」

少し前に、バスに忘れ物をしたって言ったつきり……………!!!」

「じゃあ、私達も探します!!」

子供の捜索に移る佐天、初春、美琴。

そんな三人とは別に、黒子は残りの強盗達と対峙していた。

強盗達のリーダー格らしき男が手を翳すと、そこに現れたのは焰。

男は左手に焰を留めたまま、言葉を発した。

「今更後悔しても遅えぞ……」

バイロキネシスト
発火能力者？

それを確認すると同時に迂回気味に駆け出した黒子。

それを見て、男は黒子に焰を投げつけた。

「俺を本気にさせたからには……消し炭になって……逃がすかあつ
!!!!」

カーブを描きながら黒子へと迫る火球。

男が命中を確信し、それが現実となるはずだった。

瞬間、黒子の姿が一瞬にして掻き消える。

「誰がつ……」

「き……消えたっ!?!」

「……逃げますの?」

突然眼前に現れる黒子の顔。

それに狼狽した男は、次の動作も予想せずに後退した。

黒子は又も転移し、次は男の真後ろへ。
そして、黒子の全体重を掛けたドロップキックが不用意に後退した男の後頭部へと突き刺さった。

直後、倒れた男の服に鉄矢が現れ、男の身体を地面へと縫いつけていく。

「テ……テレポーター!？」

「これ以上抵抗するのなら、次は……鉄矢を体内に直接テレポートさせますわよ?」

黒子が不適に微笑み、男は悔しそうに俯く。

その頃、美琴たちは居なくなった子供を捜していた。
バスの中、居ない。広場、居ない。

と、その時佐天の耳に男の声が飛び込んでくる。

「なんだお前!?! ちょうどいい、来い!?!」

「何お兄ちゃん? 誰??」

「良いから来いって、早く!?!」

そちらを見れば、強盗犯の一人とその男に腕を引かれ連れて行かれる少年の姿。

美琴を呼ぼうにも近くに居ない。

あたしだつて!!!

佐天は、少年を救うべく二人の下へと駆け出した。

一方、和磨は……

「怪我人を頼みます。
もうじき、救急車が来るはずですので……」

銀行内の怪我人を広場へと運び、近くに居た大人に任せていた。

《何だデメエ!? 離せよっ!!!》

《だめえっ!!!》

そんな和磨の耳に、焦る男の声と必死な佐天の声が響いた。

「…………ツ!?!」

即座に振り返ると、そこには少年を連れ去ろうとする強盗犯とそれを必死に食い止める佐天が居た。
と、男が足を上げ蹴りの動作に入る。

「間に合うかつ!?! 《音渡り》!!!!」

男の蹴りが佐天へと届く寸前、その間に和磨が入り込んだ。

「…………がつ!!!」

「ッ！？和磨さんっ！！！」

移動直後だったために受けることも出来ず、蹴りをモロに顔面に食らい吹き飛ばす和磨。

佐天は驚愕の表情で見つめ、蹴りを入れた男は近くに停めてあった車に乗り込んだ。

それを見た黒子が咄嗟に動き出す。

しかし、その動作は美琴の言葉で止められることとなった。

「黒子っ！！！」

「…………え？」

頬に一条、冷や汗を流し美琴のほうを見る黒子。

その視線の先、《超電磁砲》御坂美琴は怒りに燃えていた。

「こっからはアタシの個人的な喧嘩だから。

悪いけど…………手、出させて貰うわよ？」

身体から放電しながら、今にも走り出さんとする車を睨みつける美琴。

そんな彼女を見て、黒子に拘束された強盗犯が呟いた。

「思い出した…………」

風紀委員には捕まったが最後、身も心も踏みにじって再起不能にする。

最悪のテレポーターが居て…………」

「あら？誰のことですか？それ」

惚けたように問いかける黒子。

一方、車に乗り込んだ男は脂汗で全身を濡らし、自棄になり呟いた。

「チキシヨー……このまま引き下がれるかよー!!」

男は車のエンジンを掛け、走り出す。

と、数十メートル程走った所でドリフト、Uターンすると道路の真ん中に凜と立つ美琴に狙いを定めた。

そこで、拘束された男が先程の言葉の続きを紡ぐ。

「更には、そのテレポーターの身も心も虜にする。
最強の《電撃使い》^{エレクトロマスター}があ……!!」

「そう、あの方こそが学園都市230万人の頂点。
8人のLEVEL5の第四位……」

「新参者だが……俺も忘れて貰っては困るな……」

と、ふらりと和磨が立ち上がりそう言いながら美琴の横に並んだ。

「……あら、怪我は大丈夫ですか?」

「あの程度の蹴り、問題ない。」

「それは良かったですの。」

では続けますが、常盤台中学が誇るLEVEL5第四位《超電磁砲^{レールガン}》御坂美琴、と……」

そこまで言った所で、犯人の車が走り出しスピードを上げながら美琴と和磨に向けて走り出した。

それと同時に、美琴はコインを上へ打ち上げ、和磨は呟く。

……キーン！！

《共鳴波動・トンネル形成》

そして、学園都市の最高峰。

LEVEL5二人の技が同時に放たれた。

「いつけええええええええええ！！」

レンナスウェーブモーション
「《共鳴波動》……！！」

放たれた超電磁砲と共鳴波動は二つから一つとなり、雷撃を纏いし波動となって突き進む。

混ざり合ったそれは、《電磁波動》とでも言うべきか。

電磁波動は道路を穿ち、巻き込み、蒸発させながら猛スピードで突き進み、強盗犯の車に接触した。

「《終音……雷鳴》……！！」

そして、和磨が最後の呟きを発する。

その瞬間、電磁波動はその場で雷鳴を轟かせ、放電しながら爆散した。

アスファルトは融解し、プラズマ化した電流が地面からの放電を促す。

電磁波動の着弾地点には何一つ残らず、超高温度のクレーターののみが残った。

着弾地点が車の真下だったため衝撃に弾かれ、宙を舞う車両。

それは、二人のLEVEL5を飛び越して、遙か彼方に墜落したのだった。

「風紀委員最強の新人。

LEVEL5第三位《レンナンスウェーブモーション共鳴波動》下貴和磨ですの！！」

その後、車のエアバックにより軽傷で済んだ犯人もろとも強盗犯は急遽駆けつけた警備員に引き渡されお縄につくこととなった。

三人並んで歩き、警備員の車両に乗り込む犯人達。

その中の一人、黒子と戦った発火能力者に和磨は声を掛けた。バイロキネシスト

「お前、いつぞやの夜のカツアゲ発火能力者だよな？」バイロキネシスト

「……ああ、アンタがあの新LEVEL5とはな。

あの夜、喧嘩を売ったのが間違いつてモンだ。

ホント俺は……何をやっても……」

「……いい炎を出すようになったじゃないか。

あの日の俺の助言をしっかりと聞き、自分なりに練習したんだろう？
構成などは見てないから分からないが、着弾地点を見る限り、確実に質が上がっている。」

「……ッ！！」

「だから、しっかりと更正してやり直せ。

アドバイスが欲しければいつでもくれてやる。」

……待つてるぞ。」

「……………」

そこまで言って、歩き去る和磨。
その背を見つめた後、パイロキネシスト発火能力者は静かに微笑み、車両に乗り込んで行った。

和磨が美琴たちの下へと戻ると、そこには先程連れ去られかけていた少年とその親がいた。
その正面には、佐天の姿が。

「本当に……本当にありがとうございました!!」

「いえ、あの〜……………」

「お姉ちゃんありがとう〜!!」

少し照れた表情で俯き、子供に微笑む佐天。
その表情は、儂くも美しい……………綺麗な涙のようだった。

「……………惚れ……た。」

一言、和磨が呟いた。

親子が去った後、地面に座り込む佐天に、美琴が声を掛けた。

「お手柄だったね、佐天さん。」

「え？……いや、でもあれは和磨さんが。」

そう言つて、和磨へと視線を向ける佐天。

暫しの間目が合い、やがて佐天が頬を紅く染めて目を逸らした。

「それでも、かつこよかったよ。」

「だな、まあ……風紀委員としては危険な行動をするなど言わなければいけないのだろうが。」

力が無くとも、子供を助けようとした姿は綺麗で、勇敢だった。」

「和磨さん……」

和磨も美琴に便乗し、佐天を褒める。

その言葉に対する佐天の答えは、明るく輝く笑顔だった。

「つて、和磨さん。」

怪我の方は大丈夫なんですか!？」

「ああ、まったく問題ない。」

つと、少し口の中に異物感があるな。」

「ええ!？それってやばいんじゃない?……」

「んぐつ……プッ!！」

……カラン

「へっ?……コレって!?!」

「歯、だな。」

流石に顔面に前蹴りはきつかったか……まあ気にするな。佐天」

「いやいや、気にしますよ!?!」

「佐天、明日がお前にとって平和な日であることを……」

「和磨さん!?!病院行ってくださいって!?!?!」

第六話・電磁波動（後書き）

一応、アニメ版原作第一話まで着ました。

そろそろオリキャラを出そうかな、と。

そして、更にキャラが増える複線貼ってしまったぞつ、と。

作者は佐天LOVEです。

今話は実験的に一話を長くしようと思っただけでこまめにせず、途切れ途

切れで書いたので、矛盾点や駄文が多かったと思います。

漢字のミスからご意見・感想まで、お待ちしております。

特に今話は矛盾点などに気付いたら教えていただけたら嬉しいです。

第七話・置き去り（前書き）

今回はほのぼの系で（*）

第七話・置き去り

「ありがとうございます！！！！」

背に元気のいい店員の声を受けながら和磨は、クーラーの効いた店内から突き刺すような日差しの刺した外へと歩き出した。その両手には大きな買い物袋が持たれている。

ここは第七学区に存在するとあるスーパーマーケット食料品販売店。

和磨の住む場所からは徒歩20分と言ったところだ。

本日は平日ではあるが、和磨は学校を休みここに訪れていた。理由は単純明快、買出しである。

まあ、普通ならばそれだけで学校を休めるはずはないのだが、それについては後述する境遇の問題と、和磨がLEVEL5だと言うことが関係していた。

ぶっちゃけた話、ココ学園都市は実力至上主義な体制となっており、実力さえあればある程度の融通は利くのだった。

「暑いな……早く持っていかなば食材が痛んでしまう……」

額から一条の汗を流しながら和磨はそう呟いて、帰路を急いだ。

「ふう………ただいま。」

………キイイイ………

古くなり、開けると甲高い音が鳴る鉄柵を押し開けて和磨は呟いた。和磨が開けた柵の横に続いた塀に、その場所の名前が表記されていた。

その文字は和磨の苗字、下貴ではなく……

……《太陽の唄》。

そこは、チャイルドホムラー置き去りを預かる施設。所謂、孤児院だった。

置き去り

それは、学園都市に預けられたが、その後親が失踪、蒸発してしまった子供たちの事を指す。

要は親を亡くした、又は捨てられた孤児のことだ。

そう、和磨は孤児だった。

和磨は物心ついた頃から、ここで育った。

そんな彼はすっかり慣れた様子で靴を脱ぎ、施設の奥へと歩いていく。

「院長先生。ただいま戻りました。」

「あらあら、早かったわねえ。カズ君」

と、奥にある大きな厨房に入った和磨は、洗い場に居た老いた女性

に声をかける。

その言いようからして、彼女がこの《太陽の唄》の院長だと窺える。彼女は手元に置いてあった手ぬぐいでさっと手を拭くと、和磨に歩み寄り笑顔で口を開いた。

「暑い中ありがとうね、カズ君。手伝わよ?」

「いえ、院長先生はお休みになっていてください。こんなに暑い中で動いて、倒れられては大変ですから。」

「もう、あんまり年寄り扱いしちや駄目よ? 女はいくつになってもレディなんだからね?」

「ならば、尚更レディにお手伝いなどさせられません。料理も俺がしますから、院長先生は子供達の相手をお願いします。」

「……まったくカズ君には敵わないわねえ。」

「伊達に何年もココのまとめ役をやってませんよ。」

そう言つて朗らかに微笑むと、和磨は大きな冷蔵庫に今しがた買ってきた食材を詰め込んでいった。院長はそれを笑顔で眺めるとゆっくり振り返り、子供達が大人しく待っているであろう部屋へと歩いて行った。

「さて……作るとするか。」

その後姿が消えた頃、和磨は一人エプロンをつけて呟いた。

「カズ兄おかわり〜!!!」「ああ〜、こつちもこつちもお!!!」

「お前ら落ち着け、まだまだいっぱいあるから。」

「はあ〜い!!!」「」

元気にご飯を掻き込み、おかわりを要求する弟や妹達。

そんな子供達を窘めながら和磨はおかわりをよそい、微笑んでいた。

決して普通の家庭ではない、しかしそれに近い光景がそこには広がっていた。

下は幼稚園児から上は中学生まで、そこには10数人の《家族》が居た。

「「「ご馳走様でした!!!」「」」

「はい、お粗末さまでした。」

何だかんだのうちに食事が終わり、子供達が声を揃えて合掌する。

それに変わらず微笑みながら答える和磨。

子供達は自分が使った食器を持って流し場へと向かっていく。

これは自然とついたルールのようなもので、自分が使った食器は自分で洗うことになっている為だ。

それを見送り、和磨は自身の食器を持って立ち上がった。

しかし、そんな彼を呼び止める人が居た。
言わずもがな院長である。

「カズ君、今ちよつと良い？」

「はい？大丈夫ですが。」

「じゃあ、それ片付いたら院長室に来てくれる？」

「はい、了解しました。」

和磨がその言葉を返すと、院長は振り返り歩き去った。
再びその後姿が見えなくなった頃、和磨は呟いた。

「あの、院長先生……ご自分の食器を……」

「で、院長先生。用件はなんでしょうか？」

「あら、遅かったわねカズ君。」

「……二人分洗ったから倍の時間がかかったんですよ。」

「大変ねえ。ところで、今日呼んだ理由なんだけどね……」

厭味を混ぜて言った言葉をニコニコと破顔したまま受け流し、院長は本題を切り出した。

「……カズ君が入れてくれてる寄付金の事なんだけど。」

「足りませんか？だったら、服以外に使うこともありませんし増やしますが……」

「……違うの。」

「……でしたら、何が？」

「……カズ君は、一人暮らしをしようと思ったことは無いの？」

「いえ、ありません。」

あの……もしかして、俺が居るとお邪魔ですか？」

和磨が不安そうな顔でそう聞くと、院長はやや大げさに首を振りながらそれを否定する。

「違うのよ、カズ君が居て私はむしろ凄く助かってるわ。」

「ただ、折角奨学金が増えたのにその殆どをうちに入れて、ずっとここに居てくれるカズ君は無理してるんじゃないか、って思ってるね。」

「無理なんて……俺は、ココが好きですし。」

「皆を家族だと思ってますから……」

「それに……ココにはあの人の……」

「そうね……暗い話になっちゃってごめんなさい。」

カズ君？最後に一つだけ。」

「はい？」

「……ありがとう。」

慈愛の笑みを見せそう言った院長に、少し驚いた表情をしつつも和磨は返事を返した。

「それは、俺の台詞ですよ。」

「じゃ、少し出かけてきますね？」

「いつてらっしゃい、カズ君。」

「カズ兄お出かけ？」「遊ばないの？」

「帰ってきたら遊んでやるから、それまで院長先生の言うこと良く聞いていい子にしてな。」

「はあ〜い！〜！」「早く帰ってきてね〜！〜！」

「はいはい、それじゃ行って来ます。」

「いってらっしゃい！〜！〜！」「いってらっしゃい！〜！〜！」

少し時間がたち、和磨は再び施設の外へと出た。目的は足りなくなりそうな備品などの買出しだ。

服装は、何故か学校でもないのに制服である。

ぶつちやけた話、和磨はただ着替えるのが面倒だったのであった。

和磨はバス停に向かい、タイミング良くバス停に入ってきたバスに乗り込んだ。

その頃には、先程まで照りつけていた太陽は黒い雲にその身を隠し、冷たい雨が降り注いでいた。

どれほど経った頃だろうか？

バスの後部座席で大きな声上がる。

なにやら、口論とは違うようだがバスの中で出すには些が大きすぎる声である。

しかし、なにやら聞き覚えのある声だな……

少しそれが気になったものの、和磨はそれを注意しようと思いを振り向いた。

そこには顔を紅くした佐天と、なにやらパンフレットのような物を持った初春の姿が。

「佐天、初春？」

「だって！！バスケツチエリア……」

「つて、ええ！？」

「和磨さん！？」

「え〜っと、何……してるんだ？」

赤い顔のまま硬直する佐天に、驚愕の表情で和磨を見つめる初春。そんな二人の反応に戸惑いながらも和磨は問いかける。しかし、

「いや、あの……《次は、まなびや学舎の園入口。学舎の園入口です。

》……あっ!!」

……ピンポン

答えようとした初春の言葉を遮り、車内アナウンスが流れる。それを聞いた初春は慌てて停車ボタンを押した。

「どうせなら、和磨さんも来ちゃいましょう!!」

たぶん白井さんに言えば入れてもらえるように出来るはずです!!」

「……へ?」

そこからは初春の独壇場だった。

バスが停まった瞬間、硬直した佐天と状況を掴めていない和磨の手を引き、無理矢理バスから引き摺り下ろした。

降りたバス停は、アナウンスの通り《学舎の園入口》。

いきなりの展開に呆然としながら、和磨は走り去るバスを見送った。

「……雨、降ってるな。」

バスが視界から消え去り、全てを諦めた和磨は現実逃避をするかのように空を見ながら呟いた。

そんな和磨の呟きに、初春は鞆から取り出した小型端末を眺めながら言葉を返す。

「大丈夫ですよ。3…2…1。」

「……ん？」

と、初春のカウントと同時に雨脚が弱まり、数秒のうちに青空が広がった。

「凄いな……天気予報か？」

「天気予報というか、ツリー樹形図ダイヤモンドの設計者による演算で確定された未来の事象を読み上げている、と言ったところですね。」

「詳しいな……ホント、凄い物だ。」

「まあ、そんなことよりっ！！早く行きましょう！！！！」

和磨が感心した様子で呟いていると、なにやら気合が入った様子で初春が声を上げた。

ちなみに、佐天は未だに固まったままだ。

「行くつて……何処にだ？」

いきなり連れ出されたから何がなんだか分かっていないんだが……」

「あっ！！そうでした、用事があったかもしれないのにすみません……」

しよぼくれた様子で初春が言い、それを和磨が弁護する。

「いや、気にしなくて良い。

只の買出しで急ぎの用事でもないしな。」

「そうですね！！」

今日はですね、白井さんたちに御呼ばれして学舎の園の中に入れることになってるんですよ！！

すぐに和磨さんも入れるように白井さんに掛け合ってみますね！！
「！」

「……………学舎の園って、男が入れるのか？」

和磨の許しを聞き又も気合を入れなおした初春は、和磨の疑問などそっちのけで黒子へと電話を掛け始めた。

「ふう……………おい、佐天。

そろそろ戻って来い。」

「へっ！？あつ……………か、和磨さんじゃないですか！！！」

「やっと戻ってきたか……………」

どうやら俺も君達と一緒にいくことになったようだな。」

『はい、はい！！それじゃ、すぐに行きますねっ！！！』

そこで、ちょうど初春が電話を終えこちらに顔を向けた。

その顔に相変わらず気合が漲っている事から、どうやら交渉は成功したようだった。

「それでは参りましょう！！いざ、学舎の園へっ！！！！！」

一瞬、頭の髪飾りを摘んでやりたい衝動に駆られた。

「常盤台中学一年の白井黒子さんに招待された、初春飾りと……」

「佐天涙子です。」

所変わってここは、学舎の園入口。

学舎の園とは、第7学区にある隣接する5つのお嬢様学校が、それぞれの敷地を共用し合う形で存在し、基本的に女性しかない洋風の小さな街である。

その敷地内には、居住区（学生寮）、商店街、研究・実験施設などが存在し、街への境界線には大きな柵が設けられ、常時2000台を越える監視カメラが配備されているなど、強固なセキュリティで守られている。

さらに商品や能力開発機材も独自生産されるという自己完結した都市の一画であり、世間知らずの箱入りお嬢様を生み出すともされる町だ。

そんな学舎の園入口には、駅の改札のような物が作られており、内部に存在する学園に通う生徒は自由に出入りすることが出来る。基本的に部外者は入ることは出来ないのだが、内部の生徒からの招待が有れば話は別という物で、今現在その入場審査中だ。

初春と佐天が自己紹介をして黒子から渡された招待状を差し出し入場の許可が下りると、次は和磨が歩み出て口を開いた。

「俺は……」

「……話は白井様から聞いております。」

《共鳴波動》様でよろしいですね？」

しかし、和磨の言葉は遮られ、受付の女性が口を開いた。

「……ああ、その通りだ。」

「では、どうぞお通り下さい。」

「いいのか？そんなに簡単に男を通して。」

和磨の発した疑問。

それは言わば当然の物である。

基本的には女性しか居らず、部外者の立ち入りを禁ずる。

そんな場所に男性をすんなりと入れようというのだ。

疑問を持たないほうがおかしい。

「それについては、学舎の園内部に多数存在する監視カメラによる監視と、あなたの有名さで問題ありません。」

「……どういうことだ？」

「何かがあれば監視カメラでそれが察知でき、加えて《共鳴波動》様ともなれば知らない者は居りませんので、問題を起こすような馬鹿なことはいらないだろう。という判断です。」

それに、アナタは風紀委員でもありますしね。」

「なるほど。」

納得したが……そう言われると嫌な感じしかないな。」

若干の嫌悪感を露わにしつつ和磨が言う。

それに対し、受付の女性は深く腰を折って謝罪をしながら言った。

「それは、申し訳ありません。」

変わりと言ってはなんですが、学舎の園を存分にお楽しみください。

「

「……まあ、俺こそすまなかった。」

では、失礼する。」

受付の女性に見送られながら和磨は改札を通り抜け、待っていた佐天と初春に歩み寄り三人で並んで歩き出した。

そして、改札の先。

そこに出た瞬間、三人は足を止め揃って感嘆の声を上げた。

目の前に広がるのは外国に迷い込んだかのようなメルヘンな町並み。

石畳に白い石がはめ込まれ作られた横断歩道

描かれた人がリアルに歩く信号機。

外界とのギャップが、ココが学舎の園なんだということを改めて認識させる。

見るもの全てに感激し、声を上げながら歩き回る初春と佐天。それを眺めながら、和磨は二人と並んで歩いていた。

小さな噴水が中央に置かれた広場を横切りながら、初春がまた声を上げる。

「はう〜ん……なんて可愛らしい町なんでしょう!!!!」

「横断歩道や信号まで全部外とデザイン違うんだもん!!
凝ってるよねえ〜!!!!」

「ああ、本当にここが日本なのかと疑いそうなくらいだな。」

「ですね〜!!」

「……………うん？」

と、いきなり周りに視線をキョロキョロと動かす初春。
それを見て佐天が疑問の声をあげた。

「ん？初春？」

「どうした？」

「あのお〜……………私達、なにやら注目されてませんか？」

「……………へっ??？」

それは、先程から気づいていた。

初春の言ったことは大当たりで、学舎の園に足を踏み入れたその時からずっと、和磨たちは注目されていた。

まあ、恐らくは……

「ああ！この格好じゃない？ココじゃ外の学校の生徒が珍しいんだよ、きつと。」

それに学舎の園には居ないはずの男、和磨さんも居るしね。」

「佐天の言うとおりだろうな。」

「ああ、なるほどお！！」

説明に納得した様子を見せた初春に、佐天が目を向ける。

その佐天の視線は初春の後ろ、広場に設置された岩壁にある時計を捉えた。

「つて、ヤツバ！！もう時間だよ！！？」

「えっ??？ああっ！！ホントだあ！！！！」

時計を見て慌てたように佐天が言うと、初春も時計に目をやり時間が無いことに気が付いた。

佐天はその場で身を翻し、足どり軽く駆け出して言う。

「ほら、急いで！！」

「「あつ……………」」

その瞬間、佐天は水溜りに足を突っ込み豪快にその場で滑った。

「わっ!?!?…………あああああ!?!?」

バシヤツ！！！

「あ〜……………」

所変わって、常盤台中学校前。

荘厳な雰囲気を持つ門の前に、二人の少女の姿があった。
一人は黒子、もう一人は美琴である。

美琴は黒子へと顔を向け、焦れたように口を開いた。

「遅いわねえ、三人とも……………
待ち合わせは、ココでいいのよね??」

「ええ、初春がうちの学校を見たいといっからわざわざ校門前に
しましたのに……………
まったく、お姉さまをお待たせするとはあの子達……………」

と、その時美琴の背後から足音が聞こえてきた。
そちらへ振り返り、美琴は再び口を開いた。

「あつ、来た来た…………… って!??」

「あ、あははは……………」

美琴の視線の先には、濡れたスカートを摘み男物のカッターシャツ

を羽織った佐天と、黒のタンクトップ一枚の和磨、それに初春が三人とも苦笑いを浮かべて立っていた。それを見て、引きつった表情をしながら黒子が疑問を発する。

「……一体なんなんですか？」

「いやあ……水溜りでちょっと……」

「……………はあ？」

それから数十分後……

佐天は、常盤台中学校内の《帰様の浴院》なるシャワールームにてシャワーを浴びた後、予備のあった常盤台中学の制服に着替えていた。

間を割愛したのは、当然ながら和磨はそこに入れず外で待っていたからである。

実に残ねゲフンゲフン……いや、なんでもない。

さて、現在五人は日本全国で学舎の園内部にのみ出店しているという、有名ケーキ店を訪れている。

和磨は外で待ち、女性陣は何を買うかで迷っているようだった。と言っても、迷ってるのはもはや初春のみだが……

近くの自販機で売っていたブラックコーヒーをゆっくりと飲みながら、和磨は俯いていた。

俯いている理由？それは……

《なんでココに男性の方が居るのでしょうか？》

《あの方がLEVEL5の共鳴波動様だそうですねよ？》

《まあ……あの方が御坂様のお知り合いでもあると言っ噂の……》

「居心地が悪いな……ココは。」

学舎の園では珍しい男、しかもLEVEL5《共鳴波動》だと言うことで周囲の注目を一身に浴びているからだ。

元々余り目立つことが苦手な和磨は今の状態に閉口していた。

早く出てきてくれ、そう願いながら待ち続ける和磨。

そんな彼の願いが届いたのか、ケーキ屋から初春と黒子が出てきた。

「やっと出てき……」

「……和磨さん、風紀委員の呼び出しですの。」

しかし、黒子の口から出たのは《風紀委員》の言葉。

大方初春が迷い続けているうちに、緊急の呼び出しがかかったのだろう。

黒子是不機嫌そうに顔を歪め、初春は肩を落として頂垂れている。

「……そうか。まったく、タイミングの悪い。」

「ホントですわね……とりあえず行きますわよ！……」

「ああ、行くところか。」

兎にも角にも、支部に行かなければ何も始まらない。

そう割り切って、和磨たちは風紀委員第177支部へと急ぐのだった。

第七話・置き去り（後書き）

今話の進み具合的には原作3話の中盤までです。

前に張っておいた伏線を少し強くして、同時に和磨の境遇を、と思
いまして。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第八話・見えざる魔手（前書き）

「お前に教えてやる……お前が読んでもこの小説にはっ、まだまだ救いがあるってことをな ……あべしっ!？」

救いはないようだ……

第八話・見えざる魔手

「……慌しいわねえ」

走り去る黒子たちを見送り、美琴が呟いた。
折角の楽しい時間を潰す出来事に落胆した様子を見せる美琴だったが、気を取り直して佐天へと顔を向ける。

「それじゃ、私達はお茶に……」

「……あつ……あのお」

「ん？何？」

しかし、それを遮って佐天が口を開いた。

「あたし、ちょっとお手洗いに……あはは。」

「あゝ、わかったわ。」

「じゃあ私は席とっておくから。」

「あ、はい。」

「ありがとうございます。」

席をとりに行った美琴に背を向け、佐天はWCワールドカップではないへと向かった。

そして、手早く用を済ませると、ポケットから取り出したハンカチを啜えて手を洗う。

そんな佐天の背後、WCの入口が開いた。

それだけならば、他の客がお手洗いに来ただけだと思える。しかし、目の前の鏡に映る扉の先には、誰も居なかった。

そのことに疑問を感じ、振り返る佐天。

その目にはやはり、何も居ないのに独りでに開いた扉が写る。

そして、開いた時と同じように独りでに扉は閉まる。

その様子を見て佐天は、ハンカチを咥えたまま可愛く小首を傾げ疑問の声を上げた。

「……………へ？」

自身の背後に魔の手が忍び寄っていることに気付かずに……

「まったく……………折角の非番の日だと言っのに……………」

「ですねえ……………」

「まあ、そう言っつな。

仕事がある以上仕方のないことだ。」

和磨に黒子、初春の三人は、風紀委員第177支部の扉を開けながらそう話していた。

と、室内に脚を踏み入れると同時に和磨以外の二人の頭に、軽い力で雑誌が振り下ろされた。

「あだっ……………」 「痛っ……………」

「まったく、到着早々ばやかないの。」

叩かれた頭を押さえる二人、その正面にはメガネを掛けた女性が腕を組んで佇んでいた。

その人物の顔を見て、一瞬驚愕の表情を浮かべる和磨。対して、彼女も和磨の顔を見た瞬間同じような表情を浮かべる。

しかし、天然なのかKYなのか……………初春はそれに気付かずにその人物の名前を口にする。

「すみません……………固法先輩。」

「え……………ええ、所で後ろに居る男の子って、まさかホワイトタイガーの……………」

「……………」 『始めまして』
み……………固法先輩。俺が、新しくこの177支部に配属された下貴和磨です。」

隠そうともせずに驚愕の表情を浮かべたまま、固法は和磨について尋ねようとした。

しかし、それを言い切る前に和磨は固法の言葉に自身の言葉を被せ、言わせまいとする。

和磨の『始めまして』に少々強調された感があったことに気がついた固法は、話を合わせるかのように少しどもりながらも返答を返す。

「っ……は、『始めまして』下貴……和磨君ね。」

私は固法、固法美偉。

こちらこそ、よろしくお願いするわ。」

「で、呼び出した理由はなんですか？」

『後日事情は聞かせてもらおうよ？』、そんな言葉が聞こえてきそうな目で和磨を見ながら固法が自己紹介を澄ませると、そのタイミングを見計らったかのように黒子が本題を切り出した。

若干鼻白んだ固法だったが、本来の目的を自身が怠るわけにはいかない。

彼女は毅然とした表情で振り返ると、机の上においてあったノートパソコンへと歩み寄り情報を引き出しながら説明を始める。

「昨日の放課後から夜にかけて常盤台の生徒ばかりが六人、連続して襲われる事件があったの。」

「それはっ………」

「しかも……その全てが学舎の園の中で、ね。」

「……ッ!?」「」

固法を除く三人の顔に、驚愕が浮かぶ。

あの警備の厳重な学舎の園。

その内部で立て続けに犯行が行われ、更には犯人も特定されていないと言うのだからこれは当然の反応だろう。

それを見ながら、固法は言葉を続ける。

「常盤台中学には、LEVEL3以上の能力者しか居ない。それを狙い、意図も簡単に倒していることから……」

「相当の能力者……と言うことか。」

「……可能性は高いわね。ただ、能力は不明。」

何故かと言うと、被害者は全員犯人の姿を見ずにスタンガンで襲われ、意識を失っているの。」

「それで……被害者は？」

最後の質問を黒子が発し、それを聞いた固法はパソコンを操作して口を開いく。

こちらを見つめる瞳には真剣な光が灯っていた。

「写真があるけど……酷いよ?」

固法の眼光に気圧され、自然と息を呑む三人。

しかし、三人を代表するように黒子が一歩進み出ると、決意を告げた。

「風紀委員に志願した以上、覚悟は出来てますの。」

それに同意するように首を縦に振る初春と和磨。

「わかったわ……だけど、和磨君には見せられない。」

「ッ!? ……何故??」

「女の子のこんな姿を、例え風紀委員といっても男の子に見せるわけにはいかないわ。」

「見せてしまったら……被害にあった子が余りにも可哀想。」

「……わかりました。」

一度も目を逸らさずにそう言いきった固法の真剣さに、和磨は大人しく一歩後ろに下がった。

同時に、初春と黒子は前に出てパソコンの画面を覗き込む。

「ッ!? これはっ……!?!」「ひ、酷い……」

二人は画像を見た瞬間に息を呑むと、口々に非難の言葉を発した。その様子から、固法の言ったとおり被害者が酷い有様であることが窺えた和磨だった。

「むう……佐天さん遅いなあ。」

「紅茶、冷めちゃうよ……」

一人ケーキと紅茶を前に佐天を待つ美琴は、そう呟いた。

美琴が席を取り、注文が届いてしばらく経つというのに佐天はまだ戻ってきていなかった。

美琴はふう、と一つため息を吐いて立ち上がると、佐天の様子を見るためにお手洗いへと向かった。

WCの扉に手をかけ、少し開いて佐天を呼んでみる。

「……佐天さん？」

しかし、あるべき筈の返答はなく、不思議に思った美琴は扉を開ききり今一度佐天の名を呼んだ。

「佐天さ〜ん???……えっ!?!」

と、その美琴の視線の先には、誰かが地面に倒れ伏していた。長く艶のある黒髪に、常盤台中学の制服。

それはトイレの床に倒れ伏し気を失った、佐天涙子その人だった。

即座に駆け寄り、佐天を助け起こす美琴。

その顔をのぞき見た瞬間、美琴は小さく、息を呑む。

そして、携帯電話を取り出すと《白井黒子》の表示を探り当て、通話ボタンを押した。

「常盤台狩り……ですって?」

「ええ、昨日から続いている連続事件ですよ。」

「そっか、佐天さんうちの制服を着てたから……」

所変わり、ココは常盤台中学校内に存在する風紀委員室。

ソファーには佐天が横になり、その目元には何かを隠すかのようにタオルが乗せられている。

未だ意識を取り戻さない佐天を悲痛な表情で見つめながら、美琴と黒子は話していた。

「佐天さんの具合は……どうなんですか？」

「体のほうは大したことなく、しばらく横になれば大丈夫だろうって。」

ただ………」

そこで、和磨以外の全員が沈痛な面持ちで俯く。

どのような惨状かが分かっているぶん、三人は佐天のことが心配なのだろう。

「一体誰が……こんなことを……」

しかし、どうなっているかを知らない和磨も自身の惚れた女コトを傷つけられた怒りと、何も出来なかった悔しさから指が白くなるほど拳を握り締め、歯を食いしばって俯いていた。

その様子を見ながら、いつもより更に鋭い眼差しの美琴が問いを發した。

「犯人の目星はついてるの？」

「まだですの……少々厄介な能力者のようですね。」

「厄介って？」

悔しそうに黒子が呟き、再び美琴が問いかけると、今度は初春が続きを話す。

「目に、見えないんです。」

「えっ??」

「被害者からの情報によると、襲われた時自分は一人だった、と。しかし、監視カメラの映像では違うんです。」

「一体どう違うって言うの?」

「カメラには、写っているんですよ。」

居ないはずの二人目の存在が、くつきりと。」

「被害者の目には見えない犯人……ねえ。」

何かを考えている仕草を見せながら、美琴は宙を仰ぎ呟いた。その呟きに、黒子が自身の推測を交えて返事を返す。

「最初は、光学操作系の能力者を疑ったのですが……」

「えと、自分の姿を安全に消せる能力者は、学園都市に47人居ます。」

その全員にアリバイがあつて……」

「けど、監視カメラには写ってたんでしょ?」

光学操作系なら映像にも残らないはずだし、ちょっと違うんじゃない?」

「そうなんです……」

そこで行き詰り、三者一様に肩を落とす。
と、初春と黒子が窓の外に目を向けた。

「あつ……鳩……」

「えっ??」

「白井さん、見なかつたんですか?」

「そんなもの、『気づき』ませんでしたわ。」

その黒子の言葉に、和磨は何かを閃いたかのように顔を上げた。

「気付かない……?」

初春!!少し調べてみて欲しいのだが。」

「はい?」

和磨が自身の推測を告げ、その条件から初春は書庫ハンクを検索していく。
しばらくの間、風紀委員室にはカタカタとキーボードを叩く音だけが
鳴り響き、やがて検索を終えた初春が口を開いた。

「ありましたっ!!」

能力名は……ダメージ認識阻害。

対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力ですね……
該当する能力者は、一名。

関所中学校二年、重福じゅうふく省帆。」

「そいつですわっ！！！！」

「わわわっ！？で、でもこの人LEVEL2ですよ？

自分の存在を完全に消せるほどではないと、実験データにあります。

」

「そう…か……」

目に見えて落胆した様子で、和磨は呟いた。

と、その時和磨の耳が小さな呻き声を拾う。

「……ッ！？佐天！？」

振り返りソファーを見ると、そこには意識が回復したのか身じろぎをする佐天の姿が。

それを見て佐天に近づこうとする和磨の肩に、黒子の手が乗せられた。

「……なんだ？白井。」

「177支部で固法先輩が言っただけでしょう？

……男性に見せられる物ではない、と。」

言葉が終わると同時に、和磨の目から黒子の姿が消える。

和磨は、黒子の能力で部屋の外へと飛ばされていた。

室内からは三人の息を呑む音が聞こえ、次に佐天の疑問の声が。

そこで、和磨はその場から歩き去った。

そのまま和磨が一人で歩いていると、唐突に和磨の携帯が鳴り出す。煩わしそうに携帯を取り出し画面を見ると、そこには『白井黒子』の文字。

それを確認した和磨は通話ボタンをプッシュして、携帯を耳へと運んだ。

『和磨さん？今、何処にいらっしやいますの？』

「……………学舎の園の中だが。」

『それなら良かったですの。』

犯人が特定できましたわ、佐天さんが襲われる際に犯人を見ていましたの。

犯人は和磨さんの推測通り、例の認識阻害能力者です。』

「っ！！本当か白井！？」

黒子の報告に、興奮したように声を荒げて確認を取る和磨。その剣幕に少々驚きながらも、黒子は返答を返す。

『ええ、既に監視カメラの映像から犯人の位置を確認、佐天さんも交えて犯人確保に動いていますの。』

「そうかつ！！……………アクティブソナー《反響探知》。

位置を確認した！！すぐに向かう！！」

和磨は能力によって即座に犯人、『重福』の位置を察知。

《音渡り》での移動を開始する。

この角を曲がった所につ！！

道を曲がり路地へと入り込むと、目の前には和磨に背を向け帽子のつばを上げる佐天と対峙する重福の姿が。

「重福省帆だな？風紀委員だ、お前を連続通り魔事件の容疑者として拘束する！！」

「か、和磨さん！？」

「くっ……………」

と、佐天は驚きの声をあげ帽子を深く被り、重福は認識ダメージ障害を発動させ姿を消した。

重福が逃げたことを確認した和磨は、素早く佐天に歩み寄り声を掛ける。

「本当に消えるのだな…………佐天、大丈夫だったか？」

「え、ええ…………大丈夫です。はい」

顔を伏せ、しどろもどろになりながらそう言う佐天。

その様子から、彼女がどれだけ顔を見せたくないと思っっているかが窺えた。

そつと帽子の上に手を乗せ、頭を撫で始める和磨。

「ほえっ！？」

そんな和磨のいきなりの行動に驚く佐天。

彼女は顔を赤くしながら後ずさると、背を壁に預けた。

刹那、背中を壁にぶつけた衝撃で、撫でられたことですれた帽子が……落ちた。

「あっ!？」

重力に従い舞い落ちる帽子。

その下に隠された顔を見て、和磨は息を呑んだ。

「ッ!？さ、佐天……それはっ!？」

晒された佐天の顔、その目の上には……こ 亀の両津のような眉毛が描かれていた。

「鬼ごっこは………終わりよ?」

しばし時は流れて、とある公園。

ブランコから立ち上がった美琴がそう言葉を紡ぐ。

その目の前には今回の騒動の犯人、重福省帆の姿があった。

彼女はずっと能力を行使し逃げ続けたため、既に姿を消すことも出来ず膝に手を付いて荒れた息を整えている。
その周囲には、彼女を囲む形で立つ黒子、和磨の姿もあった。

佐天が少し離れた場所で引きつり、乾いた笑みを浮かべているのは
ご愛嬌だ。

「ど、どうして！？どうして私のダミーチェックが効かないの？」

それを視界の端に捕らえた重福は、少々狼狽しつつも疑問を発した。

「さあ？なんででしょうね？」

「くっ……これだから常盤台の連中はっ！！！」

それを軽く流した美琴に激昂したかのように、重福は叫びを上げポケットから何かを取り出した。

重福はそれを目の前に翳すと、一度確認するかのように横にあるスイッチを押す。

……バチバチバチッ！！！！

「あれは……」「犯行に使われたスタンガン、だな。」

そして重福は素早く駆け出すと美琴に向けてスタンガン突き出す。

……バチバチバチバチッ！！！！

殺^とった、そう確信して笑みを浮かべる重福。

しかし、その確信に反して美琴が倒れることはなかった。

「残念。私こゝいうの効かないんだよねえ……」

そう言つて、両手の人差し指を近づける美琴。

その指の間をスタンガンと同じように電気が行き交つ。

それを見て呆然とする重福。

そして、美琴の指が重福の腕に添えられた。

「え？きやああつ！？」

……バチバチバチツ！！！！

「手加減は、したからね？」

重福はそれに疑問の声を上げ、次の瞬間にはそれが悲鳴へと変わる。そこで、重福の意識は途絶えた。

「初春？容疑者を拘束した、と警備員に連絡してくださいな。」

黒子が監視カメラに向かいそう呼びかけると、耳元につけた端末から初春の声が響いた。

『はあ〜い。』

「お疲れ様っ！！」

最後にそう言つと通信を切り、重福をベンチへと運ぶ。

と、先程からずっと脱力したように動かない佐天に、和磨が声を掛

ける。

「佐天、大丈夫か？」

「和磨さん、こんなゲジ眉女なんかほつといて下さい……っう。」

「……相当キてるな。」

「そりゃそうですよ……こんな眉毛を男性に晒すなんて……」

「それくらいなら恐らく消せるぞ？」

和磨がそついった瞬間、佐天は高速で顔を上げると和磨に詰め寄りながら声を上げた。

「えっ！？ホントですか！？消してください！！早急に迅速に今すぐにつ！！」

「お、落ち着け。そして近いっ！！！！」

「あっ！？す、すみません……」

少し動けば唇が触れ合う距離、そんなところまで接近していた佐天は冷静になると同時にそれに気付き、頬を赤らめた。

気まずいような、気持ち良い様な、そんなピンク色の空気がその場に流れる。

と、それを遮る声があった。

「お楽しみのところ申し訳ありませんが、支部に戻りますわよ？」

「ここには警備員と初春の到着までお姉さまと佐天さんに残って頂き、私達は支部で報告書ですわ。」

「報告書……だと？」

「ええ、そうですが何か？」

「俺は書類仕事は苦手だからパ……」

「……さ、行きますわよ？」

「まっ ……!?!」

心底嫌そうな顔で後ずさる和磨の背後に黒子はテレポートで現れると、その襟元をひん掴み再び転移する。残ったのは和磨の小さな叫びと佐天に美琴、それに未だ目を覚まさない犯人だけだった。

「って、あたしの眉毛はあああああ!?!」

そして最後に響いたのは、佐天の悲痛な叫び声だった。

余談だが、この後目を覚ました重福に百合フラグを佐天が立ててしまったらしい。

それについては、佐天が話してくれないので詳細は分かっていない

のだが……

「和磨さん！！いい加減観念してくださいませんか!？」

追いついてきたな……曲がるか。

あ、そうそう。

それと、佐天の眉毛は特殊なインクで書かれたものらしく、一週間は消えないそう。

え？お前は消せるんじゃないのかって？
多分消せるが、今の俺は忙しくてな。

おっと、先回りとは。《音渡り》

「和磨さんってば！！早く報告書を書いてくれませんか仕事が終わ
りませんのよ!？」

「……先回りはフェイントか。」

「そんなに本気で逃げ回らないで下さいませんか???
たかが報告書10枚程度で……」

「10枚は多すぎるだろう、無理だ。」

「言い切らないで下さいまし。」

大体、今回の事件では能力値に書庫バンクの情報との誤差があるなどで、
検証に報告書が必要不可欠なんですの。
だから早く戻って書類を……」

「すまん、白井。」

お前にとって明日が平和であることを……《音渡り》」

「あぁっ！？早く報告書を書かせないと私に平和など訪れないと言
うのに……」

固法先輩に殺されてしまいますから……逃がしませんのっ！！！」

結局和磨は3時間もの間逃げ続け、怒った黒子に体内への異物転移
をされそうになった所で観念してお縄についたそうだ。

第八話・見えざる魔手（後書き）

最近必ずと言っていい程後半がグダグダに……orz
駄文申し訳ない^^;

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第九話・虎トラとら（前書き）

修正しました^^;

第九話・虎トラとら

星を待っていた。

カビた匂いのする風に包まれ、錆びた柵に身体を預けて。

古いビルの屋上で一人、空を見上げる。

小さく口ずさむメロディは、風に流されて暗い夜空へ消えていく。それでもただ、星を待っていた。

大きな宇宙を儂く駆ける、一条の流星を。

「モトカズさん、時間です。」

「……………ああ、すぐに行く。」

モトカズと呼ばれた男は聞こえた声に答え、前を見据えて立ち上がった。

その容姿は長く伸ばした銀髪を後ろで束ね、纏った革ジャンの背中には虎。

目はサングラスで隠され、足元はコンバットブーツで固められている。

身長は170位だろうか？

革ジャン越しにも分かる発達した筋肉からは彼の屈強さを窺い知れる。

「……………準備は？」

「全員、完璧です。後は総長を待つだけとなっております。」

「そうか……行くぞ。」

「はい!!」

モトカズを呼びに来た男が扉を開け、二人はその内へと消えていく。

暗く長い階段を下り、地上に降り立った。

目の前には無数の光と爆音。

そこには数十台の単車が止められ、その持ち主の男達が談笑していた。

モトカズが姿を現した途端、その場に居た全員が直立不動の姿勢をとり、彼を出迎える。

「待たせたな……旗持ちは誰だ？」

「俺です!!」

「康志か……」

モトカズの問いに、先程彼を呼びに来た男が元気良く答える。

彼の名前は康志と言う様だ。

と、モトカズは脇に止められていた自身の愛車Z2に跨り、号令を発する。

「気合入れるよお前ら……出発だ!!!」

「^{オス}「^{オス}「^{オス}「^{オス}「^{オス}「^{オス}」」」」」」

……ウオウオウオウオウオン!!!

息の揃った返事と共に、辺りを爆音が支配する。そして、一団はモトカズを先頭に走り出した。

バイクから伝わる心地よい振動。
タイヤが地面を？み、身体を前に押し出す感覚。
高速で後ろへと流れていく景色。

自分の身体が夜空を駆ける星になったかのような、そんな時間が彼の日常だった。

そう……この日までは。

「総長!!!大蜘蛛が合流してきました!!!」

「わかった、このまま行くぞ!!!」

「押忍!!!」

走りながら更に人数を増やし、彼らは走り続ける。
終着点などない、気の済むまで進むのだ。

しかし、そんな彼らの背後から招かれざる者が忍び寄り寄ってきていた。モトカズが異変に気付いたのは、ふとバックミラーを覗き見た時だった。

「人数が……減った？」

先程まではバックミラー一杯に移っていたはずの単車が、いつの間にかたつたの数台に減っていた。それに気付いた瞬間、嫌な予感が彼の背筋を駆け巡る。

「……康志!!」

「は、はいっ!!」

「後続の奴らはどうした!？」

「え?あ、わかりません!!」

「……つち!!今居る人員は!？」

「えと、白虎からは総長と俺のみ!!」

大蜘蛛からは、黒妻さんと蛇谷さん他数名です!!」

有り得ない、例え後ろから警備員が追い立ててきていたとしてもケツ持ちは数名で済むはずだ。

それが、数十人居た仲間がほぼ全員居ないとは……

「カズッ!!」

「…………ツ！？なんだ黒妻！！」

「後ろの様子がおかしい！！
単車ではなく車が来てんだ！！」

「なんだと！？」

途中合流した大蜘蛛のリーダー、黒妻綿流くろつまわたるの言葉に、モトカズは走りながら後ろを振り向いた。

その視線の先には、猛スピードで追い上げてくるボックスカーが。

「ありや何処の車だ！？」

「わかんねえ！！とりあえず気をつ……………
ツカズ！！前だつ！！」

「あぁっ！？」

モトカズの疑問に答える黒妻の言葉は途中で切れ、短く息を呑むと、言葉は警告へと変わった。

それを聞いて彼は即座に後ろを向いていた顔を前に戻す。

その眼前、僅か10mほど先には後ろから迫る物と同じようなボックスカーが、自身に向かい一直線に迫ってきていた。

「なっ！？」

驚愕の声を上げ、咄嗟にハンドルを切ってそれを避けようとするモトカズ。

しかし……………時既に遅し、避けられるタイミングではなかった。

し、死ん……

「……………総長ッ！！」

死を覚悟したモトカズの耳に康志の声が響くと同時に、彼の身体に衝撃が走った。

スローモーションのように流れる景色。

猛スピードで走るバイクから投げ出され宙に浮いたまま、彼は見た。車に衝突し、まるで紙くずのようにひしゃげて撥ね飛ばされるバイク。

そのバイクのライトに照らされて輝く、ぶつかった瞬間割れたボツクスカーのガラス。

そして、その身体を朱に染め宙を舞う《康志》の姿。

「や、康志いいいい！！！！」

それは、自分の叫び声だったのか。

それさえもわからないほどに頭は混乱していた。

そのせいなのかもしれない……………血に塗れ無残に潰れた康志の顔が一瞬、微笑んだように見えたのは。

と、そこでモトカズの視界に迫り来る地面が写り、一瞬の激痛の後に彼の意識は暗転した。

「……………康志っ！！ツ！？っ痛……………ココ、は……………」

次に彼が目を覚ました場所、そこは病院だった。
痛む身体に鞭を打ち、彼は身体を起こす。
体中には包帯が巻かれ、固定されて動かない腕に寂しさを覚える。
何故か、頭に靄がかかったようにはつきりせず、何故自分がここに
いるのかもわからなかった。

と、そこで病室へと誰かが入ってきた。
その人物は、まるで蛙のような顔をした初老の男性だった。
白衣を着ているところを見る限り、恐らく医者なのだろう。

「どうやら、目を覚ましたようだね。
気分はどうだい？痛いところは？」

「アンタは……?」

「おっと、すまないね。紹介が遅れてしまった。

私の琴は……そうだな、〈サンキヤンセラ〉《冥土返し》とでも呼んでくれるかね?」

「外見が豪く名前負けしてるな……」

「まあ、そう言わないでくれよ。」

で、どうして自分がここに居るかは覚えているかね?」

冥土返しの問いに、モトカズは全てを思い出した。

「ツ!! そうだ、康志は!? 康志はどうなったんだ!?」

「お、落ち着きたまえ。」

そんなに興奮しては傷が開いてしまう。」

「俺の身体のことなんかどうでも良いんだよ!!」

康志は何処だ!!!!」

「康志君、と言うのは……君と一緒にココに運び込まれた子のことだよな?」

「そのはずだ。」

で、あいつは何処にいるんだ!?
無事なんだろうな!? ええ!?!」

「落ち着け、カズ!!!!」

そこで、怒鳴るように問いを発するモトカズを諫める声が響いた。
その声の主は……

「先生は、お前を助けてくれたんだ。
少しは落ち着かねえか…… ったく。
心配した割に元気そうで損したぜ。」

「黒妻!?!」

「ああ、黒妻だ。」

カルシウム足りてねえんじゃねえのか？
牛乳でも飲め、やっぱり牛乳はムサシノ牛にゆ……」

「……んなことどうでもいいんだよ!!
康志はどうしたって聞いてんだろ!!」

「あゝ、ったく。
アイツなら無事だ。」

お前より先に意識取り戻して、今はいびきかいて寝てるよ。」
黒妻が、めんどくさそうに頭を掻きながらそう言つと、力が抜けた
ようにモトカズは後ろに倒れこんだ。

「ちよっ!?!カズ!?!」

「は、ははっ……良かった、本当に……良かった。」

「この先生はこんな威厳のない顔をしているけど、腕は確かだから。」

「威厳のない顔、は余計じゃないかね？」

と、黒妻の後ろに居た赤い革ジャンを来た女性が少しふざけて咳くと、冥土返しがそれにツッコムことでその場に笑いが生まれた。ひとしきり笑った後に、モトカズは口を開いた。

「で、そっちの女の子は？」

「ああ、こいつはうちで世話してる……」

「《固法美偉》^{このみえい}です。」

事故の時も後ろに乗ってたんですけどね……」

「あゝ、わりい。気付いてなかったわ。」

「まあ、あんだだけ色々あったんだから当たり前だろ。」

さてと……先生、美偉。ちょっと席外して貰えるか？」

いきなり黒妻が真剣な表情になった黒妻は、固法と冥土返しに退室を促した。

それに不思議そうな顔をしながらも、二人は言葉に従い病室を出て行く。

そして、病室に暫しの沈黙が漂った。

「……二人を出て行かせたってことは、今回の犯人についてか？」

「ああ、その通りだ。」

その沈黙をモトカズの問いが破り、黒妻はそれを肯定する。

「だがその前に、一つ言っておくことがある。
落ち着いて聞いてくれ、いいな？」

「？……ああ。」

「康志は……左腕が動かない。」

「ッ！？どういうことだよ！？」

「助かったことさえ奇跡だったんだ！！
左腕はもう肘まで壊死しかけていて、切らずに済んだだけ幸運だった。」

「……………」

「自分を責めるな、カズ。」

康志は、それでもお前助けられたって……笑ってやがったんだぞ？」

「……………くっ」

モトカズは身体を伏せ、シーツに顔を押し付けた。
静かな病室に小さな嗚咽が響く。

その嗚咽を遮り、再び黒妻は口を開いた。

「……お前は、犯人を見つけてどうする気だ？」

「……………決まってるんだろ。」

こみ上げる嗚咽を無理矢理押さえつけ、怒りに震えながらモトカズは口を開く。

「殺してやる……………命で償わしてやんよ!!!」

「落ち着け、カズ。

そいつを殺しても康志は喜ば……………」

「……………クカカツ!!!殺してやるよ!!!

相手が何人でも関係ねえ!!!

泣き喚いても許しを乞いても苦しめて苦しめて殺してや……………」

「……………落ち着けつつつてんだろ!!!」

壊れたように喚くモトカズの言葉を遮り、黒妻が怒鳴り声を発する。その言葉に口を閉じ、呆然とした表情を浮かべるモトカズに、彼は哀れみの視線を向けながら言った。

「犯人を捜すのは手伝ってやるよ……………
だけど、少し頭を冷やせ。いいな?」

「……………」

しかしモトカズはそれに答えずに、変わらず呆然とした表情を浮かべていた。

それを見た黒妻は、一つため息を吐いて病室を後にしたのだった。

第九話・虎トラとら（後書き）

暗い話になってしまい申し訳ない……

いきなり話が変わった理由がまだココまででは何もわからないと思いますが、次話で明らかにしていこうと思っています。

どうか、お付き合いください。

第十話・ストレンジ（前書き）

前話微修正してます^^；

第十話・ストレンジ

（
）

風紀委員第177支部の一室に、陽気なポップミュージックが鳴り響く。

それは、和磨の携帯のアラームだった。

「おや、もうこんな時間か。」

そろそろ帰らねばなんののだが……」

「ちよつと、まだ全然話し進んでないじゃない。」

それに気付いた和磨が申し訳なさそうに口を開き、それに固法が不満そうに反発する。

「すまんな。」

だが、早く帰らねば子供達が飢えてしまう。」

「……だったら仕方ないわね。」

今度、改めて聞かせてもらおうよ?」

「ああ、助かる。」

だが、それは和磨の事情を知る固法としては納得するしかない理由で、渋々と言った様子で彼女は承諾した。

和磨は手早く帰り支度を済ませると、固法に軽い会釈をして支部を後にする。

一人残された固法は、椅子に身体を沈めて深いため息を吐くと、虚空に向かい呟いた。

「白虎と大蜘蛛……か。」

「ふう……本当にすまん。美偉」

夜道を一人歩きながら、和磨は呟いた。

当然ながらその謝罪の対象である固法はココには居ないのだが。

先程固法に言った帰宅の理由。

それは和磨の嘘だった。

本当は今日の食事当番は院長であり、和磨ではない。

恐らく今頃、院長と手伝いの子供達数名が良い香りを漂わせながらせつせと夕食作りに励んでいることだろう。

彼女を騙したことに罪悪感を覚えつつも、和磨は空に浮かぶ月を仰いでいた。

「まだ、全てを語るには早すぎるんだ。

美偉にも……俺自身にも。」

しばらく立ち尽くしたまま月を眺めると、和磨は再び歩みだした。その足が向かうのは帰るべき院ではなく、学園都市内スーパーステンションにある荒廃した地域だった。

ストレンジ。

それは夢を胸に学園都市へと訪れ、夢に破れて全てを諦めた者達の居場所だ。

立ち並ぶビルや道路は荒れ果てて壁にはストリートアートが隙間なく描かれていて、本当に同じ学園都市なのかと疑うほどに辺りは暗い。

学園都市に見捨てられた町、そこは、同じく学園都市に見捨てられた者達には最高の居場所だったのだろう。

そう、一口で言ってしまえばストレンジとは学園都市の無能力者の不良、スキルアウト達の巣窟なのだ。

そんなストレンジに存在する、一つの廃ビルの屋上に和磨の姿があった。

そこそこ広い屋上には腰ほどの高さの錆びた柵以外には何も見当たらず、他のビルよりもいくらか高いココからは明るく照らされた学園都市も、暗く淀んだストレンジも全てを見渡せる。

彼は錆びた柵に手を掛けたまま空を見上げると、目を閉じて小さな声で歌を口ずさむ。

まるで誰かを、何かを思い出すかのよう。

その歌声は悲しく、儂く。

枯れた町を静かに見下ろす夜空に澄み渡っていた。

「ここは、変わらないな……」

歌が終わり、眼下を見下ろす。

遠くに聞こえるバイクの音が、少し鼻をつくカビた香りが。

そう遠くない過去を鮮明に思い出させてくれた。

……ギイイイ

と、思い出に耽る和磨の背後で草臥れた音を立てながら扉が開く。能力によって既に察知していた和磨はゆっくりと後ろを振り向いた。

開いた扉から一人の男が姿を現す。

そして、彼に続くようにぞろぞろと五人の男が現れた。

彼らは皆一様に下卑た笑顔を浮かべ、和磨を囲むようにゆっくりと距離をつめてくる。

「……何か用か？」

静かな問い。

しかし、和磨には既に彼らがココに来た理由がわかっていた。これは只の最終確認でしかない。

その理由とは……

「兄さん、能力者？」

「ああ。」

「そつかそつか、まあそれはどうでもいんだけどさ。俺らちよつち貧乏なんだわ……金、くれねえ？」

恐喝、俗にカツアゲと言われる行為である。

和磨は小さくため息を吐き、退路を断つように半円状に広がる男達を見渡した。

「もし断る、と言ったら？」

「はあ！？それマジで言ってるの？」

何でココに来たのかはしらねえけど、ストレンジは俺らの根城なんだよね。

……逃げらんねえよ？」

「何故逃げる必要があるんだ？」

「そりやお前、この人ず ……」

……タッ

和磨の問いに答えようとした男の言葉は、最後まで紡がれることなく止まる。

何故か。それは、和磨が唐突に迫ってきたためだ。

和磨はただ一歩で正面の男との距離を詰めると、同時に半身になって左足で踏み切りその場で飛び上がる。そしてその体勢から腰を捻り、体の回転に乗せて右足を振りかぶった。

「…… がっ！？」 「うおっ！？」 「おあ！？」

空中で放つ蹴り、それは総じて威力の高い物である。

何故ならば、身体が空中にある為に自身の体重を全てダイレクトに蹴りにのせることが出来るからだ。

更に言うなればこの和磨の蹴りは腰の捻りにより、振られた足に発生する遠心力による更なる重量が加えられている。その威力足るや、まともに受ければ鍛え上げた格闘家でさえ失神するレベルだろう。

そんな蹴りを受けた不運な男は、衝撃により苦痛の声を上げながら二人の仲間を巻き込みながら横に吹き飛んだ。

その眼球は既に白目を剥き、開いた口からは唾が飛び散っている。

「なっ!?! て、テメエ!?!」

「んなことして生きてストレンジから出られると思うなよ!?! コラア!?!」

即座に状況を把握し、殺気立つ男達。

和磨はスツと体中の力を抜きながら、彼らと対峙した。

正面、三人。後方に二人、か。

現存の敵戦力を心中でカウントする。

先程蹴りを入れた男は既に意識を失っている為カウント外だ。

と、正面の男のうちの一人が殴りかかってきた。体勢から推測するに、恐らく右フック。

荒れ事に慣れているとは言え所詮はただの不良、その攻撃は予備動作と隙が多すぎる。

それを見止めると和磨は素早く身を屈めた。

すると、拳は鈍く風を切り頭上を通り過ぎた。

拳を振り切った為に隙だらけとなる男、そのアゴに握られた和磨の右手が吸い込まれるように叩き込まれる。

ショートアッパーを受けた男の頭部は衝撃に反り返り、身体も伸びきった。

そして身体を半身にすると止めとばかりに身体が伸びきったことで眼前に晒された腹部に強烈な蹴りを突き刺す。

男は蹴られたところを支点に身体をくの字に折り、声も出せずに震えながら腹を押さえながらうつ伏せに倒れ伏した。

それを見届ける間もなく、和磨は拳を握り振りかぶりながら後ろを振り返る。

その拳は、まるで見えていたかのように後方から迫る男の顔面にめり込み、彼の歯を数本とその意識を刈り取った。

「ふむ……威勢の割りには大した実力でもないようだな。」

「お、お前何者だよ!?」

「ん?ただの一、学生だが。」

「んなバカ強え学生がいるかよ!!畜生があ!!」

「そう言われてもな……まだ俺は能力さえ使っていないんだが。」

「くそっ!くそっ!!舐めやがって!!」

「テメエら！一斉にかかるぞ！」

「お、おうっ！！！！」

ほんの数秒で計三人の意識を刈り取った和磨は、迫ってくる者が居ないのを確認すると余裕の表情を浮かべながら呟く。

残った三人の男達は戸惑い怖気づきながらも言葉を返し、和磨の態度に激昂した。

一人の呼びかけに残りの二人も同意する声を返し前方から二人、後方から一人が一斉に和磨に襲い掛かってくる。

それに対し和磨は……

……タンッ

「ッ！？」」「へっ！？」

斜め後ろへと飛び上がり、後方に宙返る。

正面から迫る二人は驚きの表情を浮かべ、後方から迫る男は戸惑いの声を上げた。

そして、和磨は後ろから迫っていた男の背中に両足を乗せ着地すると、その背中を踏み台とする形で踏み切り再び後方に跳躍する。

唐突に背中を押される形となった男は静止することも出来ず。それどころか速度を増して前方から迫っていた男と衝突した。

「うおおおお！？」」「ちよっ！？こっちくん ……へぶしっ！？」

正面から衝突した二人はそのままの体勢で硬直すると、ずるずると崩れ落ちて倒れ伏した。

それと同時に和磨は静かに地面に降り立ち、駆け出した。

その先に居るのは残った最後の一人。

彼は自身の見た光景が信じられず、呆然と倒れ伏した二人を眺めていた。

曇ったガラス玉のような目をした彼の顔に、和磨の右腕が迫る。

そして彼の意識もまた、一瞬にして暗転したのだった。

「……………ふう。」

血の付着した拳を、倒れた男のシャツで拭いながら和磨は疲れたような息を吐いた。

事実、彼の心臓は久しぶりの自身の身体を使った戦闘によって猛牛のように身体の内でもれまわっている。

と、彼は後ろを振り返り口を開いた。

「起きてるんだろ？」

「……………あはは、バレた？」

「呼吸音でな、思いつき蹴ったから早々起きないと思っていたのだが……………頑丈だな。」

「ま、慣れてるしねえ。兄さん強すぎるわ。」

「鍛えてるからな。」

能力を使えば一瞬で終わっていたが……」

「使うまでもなかった？」

「いや、たまには肉弾戦もしておかなければ鈍るだろう？
能力ばかりに頼っていても足元を掬われかねん。」

「はは、兄さんすつげえわ。」

苦笑い気味で答える者、それは最初に和磨に蹴りを入れられ伸びていた男だった。

彼はプルプルと震える腕で仰向けで倒れていた身体を起こし、胡坐をかいて座り込む。

「所で一つ聞きたいことがあるんだが。」

「何？負けちゃったしわかるかぎり、居えるかぎりなら話すよ。」

「……ホワイトタイガー白虎というチームを知ってるか？」

「伝説のチームじゃん。知らない方がおかしいって。」

「……お前が知ってることを全て、話して貰えないか？」

「いいけどさ。」

えっと、まず総長の名前は《モトカズ》。年齢や容姿はよくわかんねえ。

ただ鬼強いつて話だね。構成員は全盛期で1000人を超えたつて言われてる。ただど二年前に忽然と総長であるモトカズと幹部数人が消えて自然消滅した。総長と幹部の失踪は死んだとか、捕まったとか色々言われてるね。つと、こんなトコかな。」

男は一息にそれだけ語りつくすと、顔色を窺うように和磨へと顔を向ける。

和磨はそれに対し、ありがとうと礼を述べると立ち上がり、財布から万札を無造作に数枚と一枚の紙を取り出し男に手渡した。

「ちよっ……これは？」

「情報量と治療費に、俺の連絡先だ。もし、新しく白虎ホワイトタイガーの情報が入ったら連絡してくれないか？」

「あ、ああ。わかったよ。兄さん」

「恩に着る。……お前の名前は？」

「俺？俺はアキラ、久遠くおん明だ。あきひ」

「久遠、か。それじゃ、頼んだぞ。」

和磨はそう言っつて振り返ると、階段へと続く階段へと向かっていく。その背に、久遠は再び声をかけた。

「ちよ、兄さん。あんたの名前は！？」

「俺は下貴和磨だ、呼び方は好きにしてくれ。」

顔だけ久遠へと向けてそう言うと、和磨は今度こそその場から歩み去る。

後に残ったのは唯一起きている久遠と、未だに目を覚まさない五人の男達だけだった。

それから数十分後。

「俺を踏み台にしたあああああ!？」

目を覚ました男達のうちの一人がそう叫んだ。

それを自身の能力で拾った和磨は、微笑みを浮かべていた。

「今日……は平和ではなかったな。」

明日が久遠達にとって平和であることを……」

和磨さん 平和じゃないのは 君のせい(字余り)

第十話・ストレンジ（後書き）

活動報告のほうでも書いたのですが、学校の体育でバスケットをした際に左手首を酷く痛めてしまい更新が滞っていました。本当に申し訳ありません。

更新の間が空いたために練っていたストーリーが作者の頭の中でゴチャゴチャしてしまい、元々予定していた話の展開と関わってしまいました。やっと更新できました^^;

久しぶりに書いたため文章ぐちゃぐちゃ+駄文で申し訳ないです。

誤字、矛盾点など問題点がありましたらお知らせください。
批評、好評関わらず感想お待ちしてます。

感想等で頂くご指摘は全て、作者を育てる物とっておりますのでどうぞお願いします

> (一一一) <

挿話その1 《不幸少年の受難》（前書き）

明けましておめでとうございます。遅orzリアが立て込んで更新遅くなりました、申し訳ないm(´|´;)m

と、言うかですね。

久々に書いたら駄文が前より更にヒドい事になってまして……いや、この話も結局満足いく結果にはなってないんですが……。

実は5回程書き直しを重ねた結果こうなりました(´;´;´)

そうなんです、10日から書き始めてたんです。orz
くそう………続きは長くなりそうなので後書きでw

でわでわ、《不幸少年の受難》どうぞー

挿話その1《不幸少年の受難》

「当麻、強くなれ。」

「……はい？」

とある日のこと、もはやお馴染みの場所と化したファミレスで和磨は言い放った。
強くなれ、その言葉の真意が掴めず首をかしげる当麻を不機嫌そうに睨み付けながら和磨が再び口を開く。

「当麻、お前今何時だか分かるか？」

「えーっと、深夜の二時ですね。」

「ああ、普通ならとっくに寝て明日に備え体力を回復する時間の筈だな。」

では、何故そんな時間に俺たちはここにいる？」

「……上条さんが和磨さんと呼んだからです。はい」

「何故呼んだ？」

「買い物にでた所で不良達に絡まれてピンチだったから、ですね。」

「よし、なら強くなれ。」

お前が強くなれば絡まれた程度じゃあピンチにはなり得ない。
そして、ピンチじゃなければわざわざ俺が深夜に呼び出されて貴重

な睡眠時間を削る必要も無くなる。
万事解決だな。」

「あの……和磨さん？」

「なんだ？言っておくが異論は認めない。

睡眠時間の恨みは食い物の次に深いんだからな？

何度も何度も深夜や早朝に呼び出されるこっちの身にもなれ。」

「……申し訳ないです。」

項垂れ、憔悴した様子で詫びる当麻。

しかし、お眠な和磨はその程度で当麻を許せるほど優しくはなかった。

「謝ろうとも謝るまいとも、既にこれは決定事項だ。

お前の身の安全の為、そして主に俺の睡眠時間のために修行だ。当麻」

当麻を冷たく見下ろしながら最後にそう言うと、和磨はポケットから携帯電話を取り出した。

「と、言うわけで来て貰った。久遠明と愉快的仲間達だ。」

「「「「「ちいーす。「「「「「」

「和磨くんちゃーす。例の兄さんってコイツっすか？」

「ああ、そうだ。」

しかしわざわざすまん、一応依頼と言う形で報酬も用意したんだが……」

「いやいや、そんなん全然いっすよ！気持ちだけで十分っす！」

「ダメだ。怪我をする可能性もあることを頼むのだからしっかりと報酬は受け取って貰う。」

「でも……」「くどい。貰える物は貰っておけ、久遠。」

「あの……和磨さん？てか和磨様？」

「ん？なんだ当麻。気持ち悪い」

「誠に恐縮なんですけど、この方達はいつたいどういう関係で？ってか何人いんの！？」

「色々あつてな。人数は……ざっと十人弱って所か？」

「全部で13人っす！」

場所は変わって郊外の河川敷。

そこに和磨と当麻、そして前日出会った久遠含む13人のスキルアウト達が一堂に会していた。

あれから後、和磨は久遠に連絡先を教えたために連絡を取り合っただけで仲良くなっていたのだ。

そんなことを知らない当麻は一人、久遠とその『オトモダチ』の出現に冷や汗を流し、そんな彼らに慕われる和磨にビビっているのだが……。

「では、早速特訓と行こうか。」

「そつすねえ。じゃあ、まずは軽く腕試しと行きますか。」

そんなことまったく気にしない和磨と久遠は早くも動き始めていた。

「とりあえず……久遠行つとくか。」

「うつす。んじゃ行くよ？ウニ頭の兄ちゃん。」

「え？ちよつ！？まつ ……」

久遠が駆ける。

当然、まだ状況が飲み込めず棒立ち状態の当麻に向かって。

数歩で間合いを詰め、既に当麻は久遠の拳が届く距離に入っている。だが、当麻は依然動けぬままだ。

そして、久遠の拳が振りかぶられる。

「戦闘において、待つてって言われて待つ馬鹿は居ないんだわ。」

「…… ぺぶしっ！？」

当麻の体は不様に宙に舞い、残されたのは当麻の奇声と鼻血に、飽きたような和磨のため息だけだった。

「さて、どうするか。コレ」

「どうしますかねー、コレ」

和磨と久遠、並んで意識を失った当麻を見下ろす。

しかし、ただピクピクと痙攣するだけの当麻を眺めていても案が浮かんで来るはずもなく、ただ溜め息が増えるばかりだった。

「とりあえず、問題点は？」

「漠然と問われても……多すぎて言いきれませんって。」

まあ、強いて上げるならば反応の遅さってところですかね。」

「ふむ……なら、奇襲で慣れさせるか。」

「あ、いいですねそれ。習うより慣れろって奴ですか。」

「ってことで、これからの方針は『外出時の当麻への奇襲』だな。」

後は、定期的に集まり戦術至難ってところか。」

「そっすねー。皆もソレでOK？」

「」「」「うっすー！了解っすー！」「」「」

「それじゃあ、今日は当麻もノびてるしこれで解散だ。」

わざわざ来て貰っておいて申し訳ないが、顔合わせって事で勘弁し

てくれ。」

「「「お疲れ様でしたー!!!」」」

「そんじゃ、和磨くんまた今度遊びましょうねー。」

「ああ、また連絡するよ。」

ゾロゾロと帰って行く久遠達。

それを見送る和磨の背後で、当麻が目覚める。

「アレ？ここは何処？私は誰？」

「ここは学園都市。お前は上条当麻だ。大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）」

「……………」

何故かドヤ顔で返して来た当麻に、和磨は笑みを浮かべながら手を翳す。

そして、中指と親指を重ねると……

……………パチンッ

「いぎやあああああああああああ！？」

「……………大丈夫か？当麻」

「大丈夫じゃないですよ！！アンタの能力でしょコレ！？
つてなんか顔も痛いし！？何があったの俺！？」

「正気に戻ったか……………」

もだえるながら叫ぶ当麻を見て、ホッと胸を撫で下ろす。

原作主人公がシャダイ化なんてしたらたいへ…………げぶんげぶん。
いや、何でもない。

「あ、とりあえずお前の修行の第一弾は奇襲への対処に決まったか
ら。」

「え？なんですかそれ！？」

「さっきの奴等が日常的にお前に奇襲をかけるから、当麻はそれに
対して逃げるなり迎撃するなり対処しろ。以上」

「ええ！？」

「反論は認めない。ま、頑張れ。」

「ふ…………不幸だあああああああ！！」

挿話その1《不幸少年の受難》（後書き）

さて、前書きの続きです。

今回、作者は元々メインストーリーを書くつもりとしてたんですが、文の酷さに我ながら泣けて修正& amp・変更でオマケ的な話にorz
久遠君も本当ならばもっと後から再登場する筈だったんですがね（
；；；）

次話はつ！！次話こそは頑張ります！！泣
いや、今話も頑張ってはいるんですけど。ハイ。

み、見るなああああああああ！！
そんな目で俺を見るなあ！？うわあああああああああ！！

和磨「作者逃亡により、今日はここまでだ。
では、皆さんにとって明日が平和である事を……………」

紅蘭を追わねば……………《音渡り》！！！！

第十一話・都市伝説（前書き）

また暫く多忙かもなので時間あるうちにもう一話投稿っ！！

第十一話・都市伝説

「これは……先輩の友達の彼氏が、実際に遭遇したって話です。」

何も見えない暗闇の中、携帯の仄かな光に照らされた佐天の顔が浮かび上がる。

それに続くように、ぽつぽつと美琴、黒子、初春の顔が同じく携帯の光に照らされる。

「ある蒸し暑い夏の夜、彼氏さんが人気のない公園を通りかかった時のこと。」

その公園に一人佇む女の人に、駅までの道を聞かれたんです。」

佐天はそこで一度言葉を止めると、様子を窺うように一同の顔を見渡した。

見渡された三人は俄かに息を呑み、続きを促す視線を送る。

「その彼氏さんが快く女性に道順を教えていると、どこか虚ろな表情をしたその女の人がふわ〜っと手を上げて……」

緊張した面持ちの初春がグツと唾を飲んだ。

佐天はそれを気にすることもなく、右腕を眼前に掲げて話を続ける。

「……突然ガバアツと……!」

「が、ガバアツと!」

小さく声を上げたのは美琴で、その表情には恐怖と同時に話の続き

に対する期待が表れている。

そちらに視線を向けながらも佐天は掲げた拳をグツと握り締め……

「ブラウスを……脱いだんです。」

言った。

「……うん？」

暫しの沈黙がその場を支配し、黒子と美琴が疑問の声を上げる。

そして次の瞬間、美琴は勢いよく立ち上がり四人の頭上に掛けてあった暗幕を吹き飛ばしながら叫んだ。

「って、全然まったく怖くないじゃん!!」

「何をしてるんだお前らは……」

それに続くように発せられたのは、美琴たちに呼び出され今しがたファミレスに到着した和磨の呆れ声だった。

「つまり暇だったから暗幕を被って雰囲気を作り怪談話をしていたと。」

「ええ。しかし、折角雰囲気を作ってもあんな話ではねえ……」

ゆっくりと座りなおして説明を聞いた和磨が再確認すると、黒子は

呆れ顔で佐天を見つめた。

佐天は先程までは頭に被っていた暗幕を小さく折りたたみながら自身の弁護をする。

「えー……実際遭遇したら怖くないですかあ？いきなり脱ぎだす都市伝説、脱ぎ女っ！ー！」

それに対し、美琴は明後日の方向を向きながら反論する。

「怖くないっ！ー！と言っより、それってただの変質者じゃないの？」

「もしそうならば、風紀委員として取り締まるべきだな。」

「……っっていう口実で脱ぎ女が見たいわけね、この変態。」

「何故そうなる！？」

「じゃあじゃあ、こんな話はどうですか？」

と、美琴にからかわれて動揺する和磨を尻目に、初春は嬉々とした表情でパソコンを開くとあるサイトに繋いだ。

「「ん」？」「「ふむ」？」

「風力発電のプロペラが逆回転するとき、町に異変が起きるっ！ー！」

「夕方四時四十四分に学区を跨いではいけない。幻の虚数学区に迷い込むっ！ー！」

「使っだけで能力が上がる、レベルアップー……か。夢のような話

だな。」

上から初春、佐天、和磨の順にサイトに書かれた都市伝説を読み上げていく。

しかし、黒子たちはやはり否定的な意見を述べる。

「はあ……そんな下らないサイトを見るのはお止しなさいな。」

「大体、都市伝説なんて非科学的な物……ココは天下の学園都市よ？」

「まあ、ロマンがないなあ。」

「それに、本当に起きた出来事が形を変えて噂になっている場合もあるんですよ？」

「そうですね！あ、ほらっ！このどんな能力も効かない能力を持つ男、なんて学園都市ならではの感じじゃないですか。」

佐天が見つけた一つの都市伝説《どんな能力も効かない能力を持つ男》。

それは、この中にいる若干二名には覚えがある物で

「「ッ!?!」」

その二名とは言わずもがな、美琴と和磨である。

揃って小さく跳ねるような反応を見せると、ゆっくりと画面を覗き込む。

しかし、唐突に響いた黒子の笑い声によって二人の動きが止まった。

「そんな無茶苦茶な能力あるわけがないですわ。ねえ、お姉さま？」
「えっ！？あ、ああ、そうよね。あるわけないわよ……ね。」

いきなり話を振られた美琴は一瞬硬直しつつも、最後に和磨に視線を送りながら答える。
美琴と和磨、二人の視線が交錯する。

『ちよ、ちよっと！！コレってあのツンツン頭のことじゃないの！』

『恐らくな……何故都市伝説になっているのかはわからんが、これは実在する話だぞ。』

『……黙つといた方がいい感じ？』

『一応な……バラスのも面白いかもしれんがこれ以上アイツの不幸を増やしてやるのも気が引ける。』

一瞬にして交わされるアイコンタクト。
それを終えて二人は静かに頷きあった。

「……うん？」「」

その様子を眺め、残りの三人はただただ不思議そうに首を傾げていたとか。

「ま、まあ気にするな。」

所詮は都市伝説だしな……ホラ、見てみる。

この《正義の味方!? 謎の怪人耳鳴り》とか、いかにも噂ばなし?」

機転を利かせ、やや強引ながらも話題を変える和磨。
しかし、その内容は……

「なんですの？」

『近頃、学園都市第七学区にて市民を襲うスキルアウトが何者かに一瞬にして無力化されるという事が起きている。』

彼らは皆、唐突に糸が切れた人形のように倒れ込み、アンチスキル警備員によって拘束されているそうだ。

そして、彼らと被害者の証言から一人の怪人の噂が起きたのである。その名も《怪人耳鳴り》。いかにも怪しい名前ではあるが、彼は正義の味方であると推測される。

尚、名前の由来は倒されたスキルアウト達の「不思議な音が聞こえて、いつの間にか眠っていた。」

「耳元で唐突に爆音がしたんだ……耳が耳が痛えよお。」等の証言からである。』

つてコレはなんだか覚えがあるような……?」

「都市伝説つてもあながち否定できない物、みたいね……」

「は、ははは……」

四人の視線が和磨へと向き、美琴が感慨深く呟いた。

そして、後に残るのは自身が都市伝説になっていることを知った和磨の空虚な笑いだけだった。

「ふう……………」

それから数日後、和磨は一人町のベンチに腰掛けて浅く息を吐いた。その手には冷たいコーヒー、そして二の腕部分には風紀委員の腕章が。

一仕事終えた後なのか、和磨の顔には何処と無く満足げな表情が浮かんでいる。

往來を行く人々を眺めながら、コーヒーの蓋を空け……

「君、コーヒーを余り飲むべきでは無いな。特にこの暑い日には喻え冷たいコーヒーであっても、二時間後にはコーヒーに含まれるカフェインと言う物質が脳を興奮状態にさせる為、体温が上昇してしまつんだ。そもそもカフェインと言うのはな？結晶時には無臭で苦味を持つ白色の針状結晶で、俗に言う《コーヒーを飲むと夜更かしの》と言うのもこの興奮作用に依るもので……………」

「話の途中ですみませんが、どなたでしょうか？」

……………られなかった。

和磨は謎の女性の突然の登場とダメ出しに頬を引きつらせつつも笑みを返し、至極当然の問いを返す。

「……………だがしかしコーヒーを飲んだからといって長時間夜更かしかける訳では無く、個人差はあるが数日寝ずにいると脳はエンドルフィンと言う脳内麻薬を発生させてだな。カフェインよりも強い興奮状態へと導くのだよ。しかし、これは同時に脳にダメージを与えてしまつんだ。だから、その極度の興奮状態を終えると脳が肉体に指令を送り強制的な睡眠を促す為に……………」

だが、完璧にスルーされてしまった。

引きつった笑顔のまま硬直する和磨を尻目に、なおもその女性は話を続ける。

和磨は、考える事を放棄した。

「…………… と言う訳なんだよ。」

わかったかい？風紀委員の少年。」

「えっ？ええ。大変勉強になりました。ありがとうございます。」

彼女の話が終わり、和磨の意識が戻って来たのは、既に手の中の缶コーヒーが温くなっていた頃だった。

ふう……………つとやりきった表情で息を吐き、こちらを向く彼女に、和磨は最上級の笑顔（0円）を向けて礼を述べる。

無論、和磨はほとんど話を聞いてはいなかったのだが。

「あの、ところで貴女は……………」

「…………… おっと、講義に熱を入れすぎてしまったな。このままでは遅刻だ……………急ぐので、失礼する。」

「ちよっ……………」

再び和磨が彼女の名前を問おうとするも、女性は何処吹く風と言った様子で時間を確認し、スタスタと歩みさつて行ってしまった。

「……………なんだったんだあの人は。」

特徴と言えば目の下の濃いクマと、長い栗色の髪位だろうか？

掴み所がなく、マイペースな人だったな……………

いや、掴む所なら美琴や黒子に比べて格段にあるのだが……………何でもない、忘れてくれ。

とりあえず……………できる事ならばもう、会いたくないな。

最後に燃え尽きたような笑みを浮かべると、和磨トボトボと帰宅を始めたのだった。

コーヒーは、勿体ないとは思ったが捨てた。

施設に帰り着いた後に、黒子から「脱ぎ女の呪いがお姉様にいいい！！」とか電話が来たが、即座に切った。電源ごと。

今日は精神的に疲れてるんだ。

悪いが厄介事を持ち込まないでくれ……………

「和兄ー！！遊ぶんでしょー？」

「早く早くー！！急がないと和兄鬼で始めちゃうよー？」

「あー、今行くつ！！ちよつて待てつて！！」

「もう遅いやーい！！皆つ！逃げろー！！」

「あつ！テメツ！ヒノキ！！」

「へっへーん！遅い和兄が悪いんだよーだ！！」

「おっし決めた……次の鬼はお前だああああ！！」

「ちよつ！！和兄ちゃんと10秒待てつて！！うわあつ！！」

ヒノキを追いかけ出すと、子供達が一斉に俺から逃げ出した。笑みを浮かべながら子供達を追い、施設内を駆け回る。

子供つて、いいよなあ……

第十一話・都市伝説（後書き）

作者は2月から修学旅行、そして今年から受験生な為リアが更に多忙になると思われます（^-^）ちゃんと言語で完結できるのかなコレw
また更新遅くなると思いますが、どうかご勘弁をm（-）m

それでは、失礼します（-、-）

和磨「これを読んでいるあなたにとって明日が平和であることを…

……」

第十二話・量子変速（前書き）

今回は短め＋ほとんどがただの説明です。

第十二話・量子変速

「ケラヒトン 虚空爆破？」

風紀委員第177支部のクーラーが効いた室内。

そこに、和磨はいた。

十分な涼しさを保った室内にあってもその首には一筋の汗がたっ
ていて、彼がまだココについたばかりだと言う事を窺わせる。

そんな和磨の対面には黒子と固法の姿。

二人共が真剣な表情を浮かべて和磨へと視線を送っている。

と、和磨の疑問に答えるべく、固法が一瞬黒子へと視線を送った後
に説明を始めた。

「ええ、ケラヒトン 虚空爆破事件。

現在風紀委員で最重要視されている事件よ。

目的不明の連続爆破事件で、発生から現在までの負傷者は総勢9名
いずれも風紀委員からでているわ。」

「ふむ、犯行の手段は？」

事件名からある程度は推測出来るが……誤認があつては拙いからな、
詳細を頼む。」

「恐らく、犯人はシンクロトロン 量子変速の能力者ね。

どのケースでも爆破直前に重量子の急速な加速が衛星で確認されて
いるわ。

爆破の媒体となっているのはアルミ。

原理としてはアルミを基点に重量子の速度を爆発的に加速させ、一

気に周囲に撒き散らす。
つまり空き缶やスプーン、針金などアルミ製品なら全て爆弾になり得るの。」

「ちよつといいか？」

それだけの事象を起こせる能力者ならば少なくともLEVEL3、いやLEVEL4程度の実力者だろう。

書庫バンクのデータを照会すればすぐに見つかるんじゃないか？」

固法の説明の切れ間に和磨が質問を投げ掛ける。

それは、ある種当たり前の疑問である。

書庫バンクには学園都市全体の能力者名簿と能力、LEVELに加えて能力の詳細までもが登録されているのだ。

普通ならば、この書庫のデータを照会すれば即座に犯人を特定、最低でも被疑者を限定する事が出来る筈である。

「はあ……それについてはもうとっくの昔に行ったわよ。

量子変速のLEVEL4、該当者は一人だけだったわ。」

「ならば、そいつが犯人じゃないのか？」

「ところが、アリバイがあるのよ。

それも完璧なモノがね。該当した能力者は長期の入院中で、もちろん事件発生時には病院内にいた事が確認されてるわ。」

「なるほど、な。

しかし、そうなると書庫のデータに誤りがあるか、予想外の能力による犯行。

または、短期間で急速に力を付けた者の仕業、といった所か……ど

ん詰まりだな。」

「ええ、私達としても頭が痛いわ……。」

「で、何故その話を？」

俺も概要は理解していたが、経験の浅い俺に詳しい話が来るとは思っていないかったんだが。」

「それは、アナタがこの風紀委員第177支部の最高戦力であり、同時に最速で現場に駆け付けられる人員だからよ。それに経験の浅さも知識と能力でカバー出来てるしね。」

「？移動に関しては黒子の方が俺より早いんじゃない……。」

「……現場が近かった場合には、ね。」

「それについては、私からお話し致しますの。私の能力はご存じですわよね？」

「ああ、テレポーター空間転移だったと記憶しているが。」

「はい、和磨さんの言われる通り私はテレポーター空間転移能力者ですの。読んで字の通り、この能力を使えば空間を転移することにより瞬時の移動が可能。」

しかし、長距離は跳べないと言う欠点が御座います。つまりは、私の能力で現場に向かう場合、短い距離での転移を繰り返さなければなりませんの。」

結果、現場が遠ければ幾ら早く着けても能力の多用、及び連続した演算による疲労でまともに動けませんわ。」

それを考慮した上で、我が支部最高の機動力を持つのは音渡りによ

つて一気に現場に駆け付けられる和磨さんだという結論に達した次第ですの。」

「なるほどな……把握した。」

一息に語りきり、黒子は小さく息を吐いて紅茶に口をつけた。その間に、和磨は受け取った情報を頭の中で吟味する。

それを眺めながら固法は説明は以上である事を告げ、本日は解散と相成った。

ゆつくりと帰路に着く和磨。

その斜め後ろには黒子が自然な足取りで肅々と着いてきていた。

と、二人の後ろから唐突に声が掛かる。

「二人共！解散と言っておいて申し訳ないんだけど、少し書類の整理を手伝っ……」

かずま は にげだした！

くろこ は にげだした！

「あ！？ちよつと！？」

和磨くんはわかるけどなんで白井さんまで！？」

後に残るは呼び掛けた姿勢のまま叫ぶ固法と、書類の山だけであった。

「ノリで私まで逃げてしまいました……固法先輩は大丈夫でしょ

うか？」

「さあな……書類だけは苦手だ。
いや、でもこないだの女性の方が苦手の度合としては……」

「？何の事はわかりかねますが、心中御察し致しますの。
あ、寮はこちらですので私はこれで……」

「あ？ああ、気をつけて帰れよ。」

明日がお前にとって平和である事を。」

「和磨さんにとっても平和である事を願ってますわ。では、御機嫌
よう。」

次の日、静かな微笑みに怒りを宿した固法によって二人は書類地獄
と格闘するハメになったとか。

第十二話・量子変速（後書き）

グラビトン事件の詳細なんかいらねえよ、と思われる方は多いと思いますが、一応書いた方がいかなと考え一話を使わせて頂きました。

説明を煩わしいと思われる方々、申し訳ありません。

長らくアクセス数やお気に入り登録数を確認して居なかつたんですが、今日なんとなく見てみたら……驚愕しましたw

評価を下さった方、感想を下さった方、お気に入り登録して下さった方。

本当にありがとうございます。

これで我が軍は後十日は（ry
さーせんw

同時に、更新が頻繁に滞る事をお詫び致します。
誠に申し訳ありません。

実生活におきましてもうじき修学旅行を控えている事、今年受験生となる事、その他諸々の事情により執筆にかけられる時間がほぼないんですorz

ですが、極力空いた時間を使い一話一話をしっかりと書き上げて行きます！

これからもやや不定期更新気味とはなりますが、どうか共鳴波動をよろしくお願い致します。

長々と失礼しました。

また次話でお会いしましょう。

b y 作者（紅蘭）

番外へ生きる〈(前書き)〉

お久しぶりです。

番外へ生きる

静かに風が大地を撫で、添えられた花がかすかに揺れる。それを儚げに見つめる者がいた。

そう、下貴和磨その人だ。

花が添えられているのは、小さな小さな墓石だった。

名前の刻まれていないその墓石の下に眠るのは、佇む和磨の最愛の人。

どれほど時が経とうとも忘れられない、大事な人物がそこにはいるのだ。

「ここに来るのも久しぶりだな。」

哀愁を感じる笑みを浮かべ、和磨はそつと墓石に語りかけた。

「俺な、新しく友達ができたんだ。

お馬鹿な超絶不幸少年に短気な超攻撃的電撃娘、頭から花が生えてる天然少女に力がなくても困難に立ち向かう強くも可憐な女性、あと変態。」

ゆっくり目を閉じると、和磨の脳裏に騒がしくなったここ最近の出来事がフラッシュバックしていく。

初めて上条当麻と出会った日、美琴から勝負をふっかけられた日、初春と佐天に引き合わされた日、固法美偉との意外な再会、協力者となりうる久遠たちとの出会い、そして隙あらば美琴に抱き付きユリユリするへんた……いや、黒子。^{へんたい}

辟易したこともあれば、笑ったこともある。
全てが大事な日々であり、掛け替えのない思い出となるであろう記憶だ。

時間は有限で、未来は不確実。

今がどうであろうと、たった数秒後にはどうなっているかがわからない。

それが、人生だ。

だからこそ思い出は大切で、今という時間は尊いのである。
しかし、人はその尊さに気付かない、気付こうともしない。
ただただ無益に過ごし、日々の雑多に思い出を埋めていく。

大切なモノがいつでも当たり前前にそばにあることで、その価値を見失ってしまうのだ。

それを身を持って体験した和磨には、つい先日まで自身に対する戒めがあった。

それは、大切なモノを、大切な人を作らないこと。

だが、それは戒めなどという高尚なモノではなかった、身勝手な自分の自身が傷つかないようにするための逃避だったのだと今なら言える。

失ってしまうから背負うのをやめるんじゃない、たとえ失うことになろうとも背負い続け、力の限り守り通すことこそが定めであり、同時に生きるという事なのだと思付いたのだ。

過去に失った大切な人を忘れずに、新たに得た大切な仲間と生きていく勇気を和磨は手に入れようとしていた。

「お前がいたあの頃と同じように、俺はまた笑えてるかな？」

和磨は静かに目を開き表情を緩めると、墓石に向かい優しく問いかけた。

その瞬間、一際大きな風が吹いて和磨の白銀の髪を揺らし、供えられた花がその身を大空へと散らせた。

「……………まだまだ、か。」

それを否定と受け取ったのか、和磨は仄かに笑みを浮かべて踵を返し、何処かへと歩み出す。

「それじゃ……………またな。《みさき》」

最後に響いたその声は、風に攫われて静かに中空へと溶け込んでいったのだった。

番外へ生きる》（後書き）

活動報告では書いていたのですが、兄が先日の大震災で命を落とし、少々塞ぎ込んでいました。

今は兄の葬儀から時間が経ち、やっと元通りとまではいきませんが、前よりはマシな精神状況に至るまでに回復したと。

お気に入り登録をしてくださっている読者様をお待たせしてしまつて本当にすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7300n/>

とある科学の共鳴波動(Resonance wavemotion)

2011年7月6日22時25分発行